

42008

教科書文庫

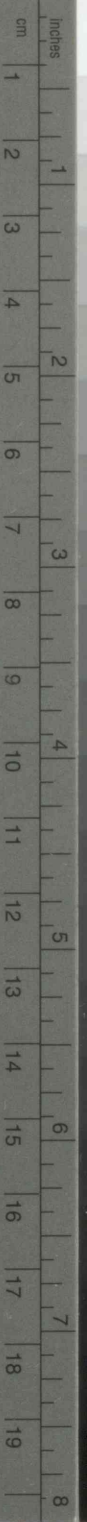
4
810
41-1936
20000 81496

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

教科書文庫
4
810
41-1936
2000081496

徒然草抄 安藤正次編



資料室

昭和十一年三月二十日

文部省檢定濟

中國學校國語文
高女學校實業學校國語科用

教科書文庫

4

810

41-1936

2000081496

42
810
昭11

安藤正次編

徒然草抄

上級用

東京廣文堂書店發行

広島大学図書

2000081496



徒
然
草
抄
目
次

一	つれづれなるまゝに	一
二	いでやこの世に	一
三	古のひじりの御代	三
四	不幸に愁に沈める人	四
五	あだし野の露	四
六	家居のつきづしく	五
七	神無月の頃	七
八	同じ心ならむ人	八
九	ひとり燈火のもとに	八
一〇	和歌こそ	九
一一	いづくにもあれ	一
一二	人は己をつまやかにし	二
一三	折節の移りかはるこそ	三
一四	よろづの事は	六
一五	おとろへたる末の世	六

目次



一六	齋宮の野宮に	一七
一七	飛鳥川の淵瀬	一八
一八	御國讓の節會	一九
一九	諒闇の年ばかり	二〇
二〇	靜かに思へば	二一
二一	人の亡きあとばかり	二二
二二	雪のおもしろう降りたりし朝	二三
二三	朝夕へだてなく	二四
二四	名利につかはれて	二五
二五	ある人法然上人に	二六
二六	五月五日賀茂の競馬を	二七
二七	春の暮つ方	二八
二八	あやしの竹の編戸のうちより	二九
二九	公世の二位のせうと	三〇
三〇	老來りて始めて	三一
三一	應長の頃	三一
三二	龜山殿の御池に	三三
三三	仁和寺にある法師	三三

三四	これも仁和寺の法師	三四
三五	御室にいみじき兒の	三六
三六	久しく隔たりて逢ひたる人	三七
三七	大事を思ひ立たむ人	三八
三八	眞乘院に盛親僧都とて	三九
三九	書寫の上人は	四一
四〇	名を聞くより	四二
四一	いやしげなるもの	四三
四二	世に語り傳ふること	四三
四三	蟻の如くに集まりて	四五
四四	世のおぼえ花やかなる	四六
四五	今やうの事どももの	四六
四六	何事も入りたぬさま	四七
四七	屏風障子などの繪	四八
四八	うすものの表紙は	四八
四九	法顯三藏	四九
五〇	人の心すなほならねば	五〇
五一	下部に酒飲ますること	五一

五二	あるもの小野道風の.....	五三
五三	奥山に猫またといふもの.....	五四
五四	ある人弓射ることを.....	五五
五五	牛を賣るもの.....	五六
五六	尊きひじりの.....	五七
五七	寸陰惜しむ人なし.....	五八
五八	高名の木のぼり.....	五九
五九	雙六の上手といひし人に.....	六〇
六〇	明日は遠國へ.....	六一
六一	宿河原といふ所にて.....	六二
六二	養ひ飼ふものには.....	六三
六三	人の才能は.....	六四
六四	無益のことをなして.....	六五
六五	雅房大納言は.....	六六
六六	顔回は.....	六七
六七	貧しき者は.....	六八
六八	花はさかりに.....	六九
六九	家にありたき木.....	七三

七〇	身死して財のこるは.....	七四
七一	悲田院の堯蓮上人は.....	七五
七二	心なしと見ゆるものも.....	七六
七三	人の終焉のありさま.....	七八
七四	明雲座主.....	七九
七五	能をつかむとする人.....	七九
七六	筆を取ればもの書かれ.....	八〇
七七	遍照寺の承仕法師.....	八一
七八	世の人相逢ふとき.....	八二
七九	一道にたづさはる人.....	八二
八〇	年老いたる人の.....	八四
八一	さしたる事なく.....	八五
八二	貝をおほふ人.....	八六
八三	若き時は血氣内にあまりて.....	八七
八四	世には心得ぬこと.....	八八
八五	降れ／＼こ雪.....	九二
八六	相模守時頼の母.....	九三
八七	よろづの道の人.....	九四

八八	けふはその事を……	九四
八九	達人の人を見る眼は……	九五
九〇	人の田を論ずるもの……	九七
九一	よろづの事は……	九七
九二	秋の月は……	九九
九三	平宣時朝臣……	九九
九四	ある大福長者……	一〇〇
九五	園別當入道……	一〇二
九六	よろづのとがあらじと……	一〇四
九七	人のものを問ひたるに……	一〇四
九八	ぬしある家には……	一〇五
九九	丹波に出雲といふ所……	一〇六
一〇〇	八つになりし年……	一〇七

徒然草抄

安藤正次編

一 つれづれなるまゝに

つれづれなるまゝに、日ぐらし硯にむかひて、心にうつりゆくよしなしごとを、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそ物ぐるほしけれ。(序段)

二 いでやこの世に

いでや、この世にうまれては、願はしかるべきことこそおほかめれ。みかどの御位はいともかしこし。竹三の園生の末葉まで、人間の種ならぬぞやんごとなき。一の人の御有様は更なり、ただうど

〔一〕孝王築東苑、方三百里。
註に、俗人言、築孝王竹園也。(史記)
孝王は漢の文帝の子、景帝の弟。



も、舎人^二など賜はるきはは、ゆゝしと見ゆ。その子うまごまでは、はふれにたれど、なほなまめかし。それより下つ方は、ほどにつけつ、時にあひ、したり顔なるも、みづからはいみじと思ふらめど、いと口惜し。

〔一〕思はむ子を法師になし
たらむこそはいと心苦し
けれ。さるは、ただ木の端
しきわざを、思ひたらむ
などのやうに思ひたらむ
こそ、いとほしけれ
(枕草子)
〔二〕参議橋恒平の子。天台
宗の僧。僧正となつて多
武峰に住む。長保五年歿。

法師ばかり、うらやましからぬものはあらじ。人^三には木の端のやうに思はるゝよ。と、清少納言が書けるも、げにさることぞかし。勢猛にのゝしりたるにつけて、いみじとはみえず。増賀^四ひじりのいひけむやうに、名聞^五ぐるしく、佛の御教に違ふらむとぞ覺ゆる。ひたぶるの世捨人は、なか／＼あらまほしきかたもありなむ。人は、かたち有様の優れたらむこそ、あらまほしかるべけれ。ものうちいひたる、聞きにくからず、愛敬^六ありて、言葉多からぬこそ、あかず向はまほしけれ。めでたしと見る人の、心劣りせらるゝ、本性見えむこそ、くちをしかるべけれ。しな、かたちこそうまれつきた

らめ、心はなどか、賢きより賢きにもうつさばうつらざらむ。かたち心ざまよき人も、さえなくなりぬれば、品くんだり、顔にくさげなる人にもたちまじりて、かけず、けおさるゝこそ、本意なきわざなれ。ありたきことは、まことしき文の道、作文^七、和歌管絃の道、また有職^八に公事^九のかた、人のかゝみならむこそ、いみじかるべけれ。手などつたなからず走りかき、聲をかしくて、拍子^十とり、いたましうするものから下戸^{十一}ならぬこそをのこはよけれ。(第一段)

三 古のひじりの御代

古のひじりの御代のまつりごとをも忘れ、民のうれへ、國のそこなはるゝをも知らず、よろづに清らをつくして、いみじと思ひ、所せきさましたる人こそ、うたて思ふところなく見ゆれ。衣冠^{十二}より馬車^{十三}に至るまで、有るに隨ひて用ひよ。美麗を求むることなかれ。と

〔一〕始^一、自^二衣冠^三及^四于^五車馬^六、隨^七有用^八之^九。勿^十求^{十一}美麗^{十二}。

〔一〕右大臣藤原師輔。天徳四年歿。
〔二〕禁秘抄。三卷。
〔三〕「但天位着御物以疎爲美」

〔四〕源俊賢の子。從三位權中納言。後一條天皇の近習。天皇の崩じ給ふや承二年歿。大原に住した。永

〔五〕墓地の名。嵯峨の奥、愛宕山の麓にあつたといふ。
〔六〕洛東阿彌陀峰の裾一帯の墓地の名。

ぞ九條殿の遺誠にも侍る。順徳院の禁中の事ども書かせ給へるにも「おほやけの奉り物は、おろそかなるをもてよしとす。」とこそ侍れ。(第二段)

四 不幸に愁に沈める人

不幸に愁に沈める人の、かしらおろしなど、ふつゝかに、思ひとりたるにはあらで、あるかなきかに、門さしこめて、待つこともなくあかしくらしたる、さる方にあらまほし。顯基中納言のいひけむ、配所の月罪なくて見む。こと、さもおぼえぬべし。(第五段)

五 あだし野の露

あだし野の露消ゆるときなく、鳥部山の烟立ちさらでのみ住みはつるならひならば、いかにものあはれもなからむ。世はさだ

めなきこそいみじけれ。

命あるものを見るに、人ばかり久しきはなし。蜉蝣のゆふべを待ち、夏の蟬の春秋を知らぬもあるぞかし。つくゞと一とせをくらす程だにも、こよなうのどけしや。飽かずをしとおもはば、干とせをすごすとも、一夜の夢の心地こそせめ。すみはてぬ世に、みにくき姿を待ちえて何かはせむ。

かたちを愧づる心もなく、人にいでまじらはむことを思ひ、夕の日に子孫を愛し、さかゆく末を見むまでの命をあらまし、ひたすら世を貪る心のみふかく、物のあはれも知らずなりゆくなむあさましき。(第七段)

六 家居のつきぐしく

家居のつきぐしくあらまほしきこそ、かりのやどりとは思へ

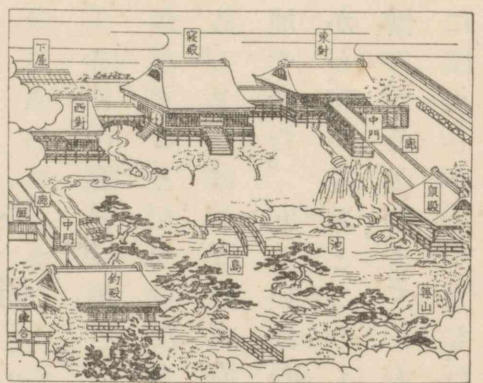
ど興あるものなれ。よき人のどやかに住みなしたる所はさし
入りたる月の色もひとときはしみぐしくと見ゆるぞかし。今めかし
くきらゝかならねど木立ものふりてわざとならぬ庭の草も心あ
るさまに、簀子透垣のたよりをかしくうちある調度も昔おぼえて
やすらかなるこそ心にくしと見ゆれ。多くのたくみの心をつく
してみがきたて唐の大和のめづらしくえならぬ調度ども列べお
き前裁の草木まで心のまゝならずつくりなせるは見るめも苦し
くいとわびし。さてもやは長らへ住むべきまた時のまの煙とも
なりなむとぞうち見るよりも思はるゝ。大かたは家居にこそこ
とざまは推しはからるれ。

後徳大寺のおとどの寢殿に鶯居させじとて、繩を張られたりけ
るを、西行が見て、鶯のゐたらむ何かは苦しかるべき。この殿の御
心、さばかりにこそ。とて、その後は参らざりけると聞き侍るに、綾小

〔一〕左大臣藤原實定、歌人。建久二年歿。

〔二〕性恵法親王。龜山天皇の皇子。

〔一〕京都市東山區栗栖野。



路の宮のおはします小坂殿の棟に、いつぞや繩を引かれたりしかば、かのためし思ひ出でられ侍りしに、まことや、鳥のむれるて、池の蛙をとりければ御覽じ悲しませ給ひてなむ。と、人の語りしこそ、さてはいみじくこそとおぼえしか。徳大寺にも、いかなる故か侍りけむ。(第十段)

七 神無月の頃

神無月の頃、栗栖野といふ所を過ぎて、ある山里に尋ね入ること侍りしに、遙かなる苔の細道を踏みわけて、心細く住みなしたる庵あり。木の葉に埋もるゝ、笥の雫ならでは、露おとなふものなし。閑伽棚に菊・紅葉など折りちらしたる、さすがに住む人のあればな

るべし。かくても、あられけるよと、あはれに見るほどに、かなたの庭に大きな柑子の木の、枝もたわゝになりたるが、まはりをきびしく圍ひたりしこそ、少しことさめて、この木なからましかばと覺えしか。(第十一段)

八 同じ心ならむ人

同じ心ならむ人と、しめやかに物語して、をかしきことも、世のはかなきことも、うらなくいひ慰まむこそ、うれしかるべきに、さる人あるまじければ、つゆ違はざらむと對ひ居たらむは、ひとりある心地やせむ。互にいはむほどのことをばげにと聞かひあるものから、聊か違ふところもあらむ人こそ、われはさやは思ふ。など争ひ憎み、さるからさぞ。とも、うち語らば、つれづれ慰まめと思へど、げには少しかこつ方も、われと等しからざらむ人は、大かたのよしな

しごといはむほどこそあらめ、まめやかな心の友には、遙かにへだたりたるところのありぬべきぞわびしきや。(第十二段)

九 ひごり燈火のもごに

ひとり燈火のもとに文をひろげて、見ぬ世の人を友とすること、こよなう慰むわざなれ。文は文選のあはれなる卷々、白氏文集、老子の言葉、南華の篇。この國の博士どもの書けるものも、いにしへのあはれなること多かり。(第十三段)

一〇 和歌こそ

和歌こそなほをかしきものなれ。あやしのしづ山がつのしわざも、いひ出づればおもしろく、おそろしきものしゝも、ふす猪の床といへば、やさしくなりぬ。

〔一〕梁の武帝の子昭明太子の編。周末から六朝までの詩文を集めたもの。
〔二〕唐の白樂天の詩文集。
〔三〕周の老聃の著。老子のこと。
〔四〕周の莊子の著。莊子のこと。

〔一〕紀望行の子。歌人。古今和歌集撰者の一人。天慶九年歿。年六十五。
 〔二〕絲によるものならなくに別れ路の心細くもおもほゆるかな（古今集、羈旅歌）
 〔三〕醍醐天皇の延喜五年に成る。わが國最初の勅撰歌集。
 〔四〕五十四帖。紫式部の著
 〔五〕土御門天皇の元久二年に成る。勅撰歌集の第八
 〔六〕冬の來て山もあらはに木の葉ふり残る松さへ峰にさびしき（新古今集、冬歌、祝部成仲）
 〔七〕源時長の子。後鳥羽天皇に仕へ和歌所の開闢となる。嘉禎二年歿。

このごろの歌は、ひとふしをかしくいひかなへたりと見ゆるはあれど、古き歌どものやうに、いかにぞや、ことばのほかには、あはれにけしきおほゆるはなし。貫之が、^{〔三〕}絲によるものならなくにといへるは、古今集の中の歌屑とかやいひ傳へたれど、今の世の人の詠みぬべきことがらとは見えぬ。その世の歌には、すがたことば、この類のみ多し。この歌にかぎりて、かくいひたてられたるも、知りたし。源氏物語には、^{〔四〕}ものとはなしにとぞ書ける。新古今には、^{〔五〕}残る松さへ峰にさびしきといへる歌をぞいふなるは、まことに、少しくだけたる姿にもや見ゆらむ。されどこの歌も、衆議判の時、よろしきよし沙汰ありて、後にも殊更に感じ仰せ下されけるよし、^{〔七〕}家長が日記には書けり。

歌の道のみいにしへに變らぬなどいふこともあれど、いさや。今も詠みあへるおなじ詞、歌枕も、昔の人のよめるは更におなじも

のにあらず。やすく、すなほにして、すがたも清げにあはれも深く見ゆ。梁塵秘抄の^{〔六〕}野曲の詞こそ、またあはれなることはおほかめれ。昔の人は、いかにいひ棄てたることぐさも、皆いみじく聞ゆるにや。（第十四段）

二 二 いづくにもあれ

いづくにもあれ、しばし旅立ちたるこそ、目さむる心地すれ。そのわたり、こゝかしこ見ありき、田舎びたるところ、山里などは、いと目なれぬことのみぞ多かる。都へたより求めて文やる。「そのことかのこと、便宜に忘るな」などいひやるこそをかしけれ。さやうの所にてこそ、よろづに心づかひせらるれ。持てる調度まで、よきはよく、能ある人、かたちよき人も、常よりはをかしとこそ見ゆれ。寺・社などに忍びて籠りたるもをかし。（第十五段）

〔一〕後白河天皇の御作といふ。

一三 人は己をつゞまやかにし

〔一〕支那の帝堯時代の隠者。

人は己をつゞまやかにし、おごりを退けて財を持たず、世を貪らざらむぞいみじかるべき。昔より賢き人の富めるは稀なり。もろこしに許由〔一〕といひつる人は、更に身にしたがるはへもなく、水をも手してさゝげて飲みけるを見て、なりひさごといふものを人の得させたりければ、或時木の枝にかけたりければ、風に吹かれて鳴りけるを、かしがましとて棄てつ。また手にむすびてぞ、水も飲みける。いかばかり心のうちすゞしかりけむ。孫晨〔二〕は冬の月にふすまなくて、藁一つかねありけるを、夕にはこれに臥し、朝にはをさめけり。もろこしの人はこれをいみじと思へばこそ、しるしとゞめて世にも傳へけめ。これらの人は、語りもつたふべからず。(第十八段)

〔二〕支那の晋時代の人。

一三 折節の移りかはるこそ

折節の移りかはるこそ、ものごとにあはれなれ。物〔一〕のあはれは秋こそまされ。と人ごとにいふめれど、それもさるものにて、いまひとときは心も浮き立つものは、春のけしきにこそあめれ。鳥の聲なども、ことのほかに春めきて、のどやかなる日影に、垣根の草萌え出づる頃より、やゝ春深く霞みわたりて、花もやうくけしきだつ程こそあれ、折しも雨風うちつきて、心あわたゞしく散りすぎぬ。青葉になりゆくまで、よろづにたゞ心をのみぞなやます。花〔二〕橘は名にこそ負へれ、なほ梅〔三〕のほひにぞ、古のことも立ちかへり、こひしう思ひ出でらるゝ。山吹の清げに、藤のおぼつかなきさましたる、すべて思ひすてがたきこと多し。

灌佛〔四〕の頃、祭〔五〕の頃、若葉の梢すゞしげに、茂りゆく程こそ、世のあは

〔一〕春はただ花のひとへに、咲くばかり物のあはれは、秋ぞまされる。(拾遺集、雑歌下、読人不知)

〔二〕さつきまつ花橘の香を、かげばむかしの人の袖の香ぞする。(古今集、夏歌、読人不知)

〔三〕風のさと吹き入るるに、花〔紅梅〕の香も客人の御に、句も橘ならねど昔おもひ出でらるるつまなり。(源氏物語、早蕨)

〔四〕陰曆四月八日の佛生會、〔五〕賀茂祭をいふ。陰曆四月中の酉の日に行はれた

一三 折節の移りかはるこそ

れも、人の戀しさもまされ。と、人の仰せられしこそ、げにさるものなれ。五月、あやめふく頃、早苗とる頃、水鶏のたゝくなど、心ぼそからぬかは。みな月の頃、あやしき家に夕顔の白く見えて、蚊遣火ふすぶるもあはれなり。みな月祓またをかし。

棚機祭るこそなまめかしけれ。やうく夜寒になるほど、雁鳴きて來る頃、萩の下葉色づくほど、わさ田刈り干すなど、とり集めたることは秋のみぞ多かる。又野分のあしたこそをかしけれ。いひつゞくれば、皆源氏物語・枕草子などにことふりにたれど、同じことまた今更にいはじともあらず。おぼしき事はぬは腹ふくるゝわざなれば、筆にまかせつゝ、あぢきなきすさびにて、かいやり棄つべきものなれば、人の見るべきにもあらず。

さて冬枯のけしきこそ、秋にはをさく劣るまじけれ。汀の草に紅葉の散り止まりて、霜いと白う置ける朝、遣水より煙の立つこ

〔一〕十二月十九日から三日間、禁じて行はれる佛事。

〔二〕歳暮に十陵八墓に初穂を献する勅使。

〔三〕十二月晦日に行はれる鬼やらひ。

〔四〕元旦、天皇が庭上に出でまして、天地四方及び山陵を拜し給ふ儀式。

そをかしけれ。年の暮れはてて、人毎に急ぎあへる頃ぞ、又なくあはれなる。すさまじきものにして、見る人もなき月の、寒けくすめる二十日あまりの空こそ、心細きものなれ。御佛名・荷前〔三〕のさきの使たつなどぞ、あはれにやんごとなき。公事どもしげく、春のいそぎに取り重ねて催し行はるゝさまぞいみじきや。追儼〔三〕より四方拜〔四〕につづくこそおもしろけれ。つごもりの夜、いたう暗きに、松どもともして、夜半過ぐるまで、人の門叩き走りありきて、何事にかあらむ、事しくのゝしりて足を空にまどふが、曉方より、さすがに音なくなりぬるこそ、年の名残も心細けれ。亡き人の來る夜とて、魂祭るわざは、この頃都にはなきを、あづまの方にはなほすることにてありしこそ、あはれなりしか。かくて明けゆく空の景色、昨日に變りたりとは見えねど、引きかへ珍らしき心地ぞする。大路のさま、松立てわたして、花やかに嬉しげなるこそ、またあはれなれ。(第十九段)

一四 よろづの事は

よろづの事は、月見るにこそ慰むものなれ。或人の「月ばかりおもしろきものはあらじ」といひしに、又ひとり「露こそあはれなれ」と争ひしこそをかしけれ。折にふれば、何かはあはれならざらむ。月花は更なり、風のみこそ人に心はつくめれ。岩に碎けて、清く流るゝ水のけしきこそ、時をもわかずめでたけれ。〔一〕沉湘日夜東流去。不爲愁人住少時。〔二〕三體詩、戴叔倫。〔三〕晋の竹林七賢の一人。流るゝ水は更なり、風のみこそ人に心はつくめれ。岩に碎けて、清く流るゝ水のけしきこそ、時をもわかずめでたけれ。〔一〕沉湘日夜東流去。不爲愁人住少時。〔二〕三體詩、戴叔倫。〔三〕晋の竹林七賢の一人。流れ去る愁人の爲にとゞまること少時もせず。といへる詩を見侍りしこそあはれなりしか。嵇康も〔四〕山澤に遊びて魚鳥を見れば、心たのしむ。といへり。人遠く水草清きところにさまよひありきたるばかり、心なぐさむことはあらじ。〔第二十一段〕

一五 おとろへたる末の世

〔一〕仁壽殿前にある。
〔二〕清涼殿内にある。

〔三〕藤原實基。左大臣實定の孫。文永十年歿。

〔四〕齋王が伊勢に赴き給ふ前、齋戒のためにおはします宮。京都の西、嵯峨の有栖川にあつた。

おとろへたる末の世とはいへど、なほ九重の神さびたるありさまこそ、世づかずめでたきものなれ。露臺朝餉何殿何門などはいみじともきこゆべし。あやしのところにもありぬべき小菰小板敷高遣戸なども、めでたくこそ聞ゆれ。陣に、夜のまうけせよ。といふこそいみじけれ。夜の御殿のをば、かいたもし、とうよ。などいふ。まためでたし。上卿の陣にて事おこなへるさまは更なり、諸司の下人どもの、したり顔になれたるもをかし。さばかり寒き夜もすがら、こゝかしこにねぶり居たるこそをかしけれ。内侍所の御鈴の音は、めでたく優なるものなり。とぞ、徳大寺の太政大臣はおほせられける。〔第二十三段〕

一六 齋宮の野宮に

齋宮の野宮におはしますありさまこそ、やさしくおもしろきこ

との限とはおぼえしか。經佛など忌みて、なかご染紙などいふなるもをかし。

すべて神の社こそ、すてがたくなまめかしきものなれや。ものふりたる森のけしきもたゞならぬに、玉垣しわたして、榊ツツミに木綿ウタマかけたるなど、いみじからぬかは。ことにをかしきは、伊勢二・賀茂・春日三・平野・住吉・三輪貴船吉田・大原野・松尾・梅宮。(第二十四段)

一七 飛鳥川の淵瀬

三 飛鳥川の淵瀬常ならぬ世にしあれば、時移り事去り、たのしびかなしび行きかひて、花やかなりしあたりも人住まぬ野らとなり、變らぬ住家は人改まりぬ。桃李三言はねば、誰と共にか昔を語らむ。まして見ぬ古の、やんごとなかりけむ跡のみぞ、いとほかなき。

四 京極殿五・法成寺など見るこそ、志とゞまり、事變じにけるさまはあ

一 伊勢は皇大神宮。賀茂野野、貴船、吉田、大原、春日、三輪、梅宮は山城國。住吉は攝津國にある。

二 世の中は何か常なる飛鳥川二なる三のふの淵四ぞけふは五瀨六なる七。(古今集、雜下讀人不知)

三 桃李不言、春幾暮、煙霞無跡昔誰栖。(和漢朗詠集、菅原文時)

四 京都、土御門の南、京極の西にあつた藤原道長の邸宅。

五 京都、五條河原にあつた寺。道長入道後建立してこれに住んだ。

一 藤原道長。

二 花園天皇の御代の年號

三 藤原伊尹の養子。權大納言。書に長じ道風・佐理と共に三蹟と稱せられた。
四 源兼行。一條天皇の御代の人。能書。能書。御

はれなれ。御堂殿二のつくりみがかせ給ひて、庄園多く寄せられ、わが御ぞうのみ、みかどの御うしろみ、世のかためにて、行末までと思しおきし時、いかならむ世にもかばかりあせはてむとは思してむや。大門・金堂など、近くまでありしかど、正和三の頃南門は焼けぬ。金堂はその後倒れ伏したる儘にて、とりたつるわざもなし。無量壽院ばかりぞ、そのかたとて残りたる。丈六の佛九體いと尊くて列びおはします。行成三大納言の額、兼行四が書ける扉、あざやかに見ゆるぞあはれなる。法華堂なども未だ侍るめり。これもまたいつまでかあらむ。かばかりの名残だになき所々は、おのづから礎ばかり残るもあれど、さだかに知れる人もなし。さればよろづに見ざらむ世までを思ひおきてむこそはかなかるべけれ。
(第二十五段)

一八 御國讓の節會

〔一〕花園上皇。文保二年二月、後醍醐天皇に御讓位

御國讓の節會行はれて、劍璽・内侍所わたし奉らるゝほどこそ、かぎりなう心ぼそけれ。新院〔二〕のおりゐさせ給ひての春、詠ませ給ひけるとかや。

殿もりのとものみやつこよそにしてはらはぬにはに花ぞ散りしく

今の世のことしげきにまぎれて、院には参る人もなきぞさびしげなる。かゝる折にぞ、人の心もあらはれぬべき。（第二十七段）

一九 諒闇の年ばかり

諒闇の年ばかりあはれなることはあらじ。倚廬の御所のさまなど、板敷をさげ、蘆の御簾をかけて、布の帽額〔三〕あらしく、御調度どもおろそかに、みな人の装束〔三〕太刀平緒まで、ことやうなるぞゆゝしき。（第二十八段）



〔三〕装束。

二〇 静かに思へば

静かに思へば、よろづ過ぎにしかたのこひしさのみぞせむ方なき。人しづまりて後、長き夜のすさびに、何となき具足とりしたゝめ、残しおかじと思ふ、反古などやりすつる中に、亡き人の手習ひ、繪かきすさびたる、見出でたるこそ、たゞその折の心地すれ。この頃有る人の文だに、久しくなりて、いかなる折、いつの年なりけむと思ふは、あはれなるぞかし。手馴れし具足なども、心もなくて、かはらず久しき、いとかなし。（第二十九段）

二一 人の亡きあそばかり

人の亡きあそばかりかなしきはなし。中陰のほど、山里などにうつろひて、たよりあしくせば、き所に、あまたあひ居て、後のわざど

も營みあへる、心あわたゞし。日數の早く過ぐるほどぞ、ものにも似ぬ。はての日はいとなさけなう、たがひにいふこともなく、われかしこげに物ひきしたゝめ、ちりくゝに行きあかれぬ。もとの住家にかへりてぞ、更に悲しきことは多かるべき。「しかくゝのことにはあなかしこ。あとのため思むなる事ぞ、」などいへるこそ、かばかりの中に何かはと、人の心はなほうたて覺ゆれ。

年月経ても、つゆ忘るゝにはあらねど、去るものは日々に疎しといへることなれば、さはいへど、その際ばかりはおぼえぬにや、よしなしごとといひてうちも笑ひぬ。

骸はけうとき山の中にをさめて、さるべき日ばかりまうてつゝ見れば、ほどなく卒都婆も苔むし、木の葉ふりうづみて、夕の嵐、夜の月のみぞ、こととふよすがなりける。思ひ出でて忍ぶ人あらむほどこそあらめ。そも又ほどなくうせて、聞き傳ふるばかりの末々

〔一〕去者日以疎、來者日以親。(文選)

〔二〕古墓何代人、不知姓名。化作路傍土、年年春草生。(白氏文集)

〔三〕古墓碧爲田、松柏摧爲薪。(文選)

はあはれとやは思ふ。さるは、跡とふわざも絶えぬれば、いづれの人と名をだに知らず、年々の春の草のみぞ、心あらむ人はあはれとも見るべきを、はては嵐にむせびし松も、千年を待たて薪にくだかれ、古き墳はすかれて田となりぬ。そのかただになくなりぬるぞかなしき。(第三十段)

三 雪のおもしろう降りたりし朝

雪のおもしろう降りたりし朝、人のがりいふべきことありて、文をやるると、雪のこと何ともいはざりし返事に、この雪いかゞ見ると、一筆のたまはせぬほどの、ひがくゝしからむ人の仰せらるゝこと、聞き入るべきかは。かへすくゝもくちをしき御心なり。といひたりしこそ、をかしかりしか。今は亡き人なれば、かばかりのことも忘れがたし。(第三十一段)

三 朝夕へだてなく

朝夕へだてなく馴れたる人の、ともある時、我に心おき、引きつろへるさまに見ゆるこそ、今更かくやはなどいふ人もありぬべけれど、なほげにくしく、よき人かなとぞ覺ゆる。疎き人のうち解けたる事などいひたる、またよしと思ひつきぬべし。(第三十七段)

二 名利につかはれて

名利につかはれて、静かなるいとまなく一生を苦しむるこそおろかなれ。財多ければ身を守るにまどし。害を買ひ、わづらひを招くなかだちなり。身〔一〕の後には、金〔二〕をして北斗をさふとも、人のためにぞわづらはるべき。おろかなる人の目を喜ばしむるたのしび、又あぢきなし。大きなる車、肥えたる馬、金玉のかざりも、心あ

〔一〕 身後堆シテ金柱ニ北斗ヲ、
不レ如ク生前一樽酒。(白氏文集)

〔二〕 捐テ金於山ニ、沈ム珠於淵ニ、
(文選)

らむ人は、うたておろかなりとぞ見るべき。金〔一〕は山に棄て、玉は淵に投ぐべし。利にまどふはすぐれておろかなる人なり。

うづもれぬ名を長き世に残さむこそあらまほしかるべけれ。位高くやんごとなきをしも、すぐれたる人とやはいふべき。おろかにつたなき人も、家に生れ時にあへば、高き位にのぼり、おごりなきはむるもあり。いみじかりし賢人、聖人みづから卑しき位にをり、時にあはずして止みぬる、また多し。ひとへに、高きつかさ位を望むも、次におろかなり。

智慧と心とこそ、世にすぐれたる譽も残さまほしきを、つらく思へば、譽を愛するは、人のきゝを喜ぶなり。譽むる人、毀る人、共に世にとゞまらず。傳へ聞かむ人、またく速かに去るべし。誰をか恥ぢ、誰にか知られむことを願はむ。譽は又毀のもとなり。身の後の名残りて、更に益なし。これを願ふも、つぎにおろかなり。

たゞ強ひて智をもとめ、賢をねがふ人のためにいはゞ、智慧出でては偽あり、才能は煩惱の増長せるなり。

傳へて聞き、學びて知るは、まことの知にあらず。いかなるをか智といふべき。可不可は一條なり。いかなるをか善といふ。まことの人は、智もなく、徳もなく、功もなく、名もなし。誰か知り、誰か傳へむ。これ徳を隠し、愚を守るにあらず。もとより賢愚得失の境に居らざればなり。迷の心をもちて、名利を要むるに、かくの如し。萬事は皆非なり。いふに足らず、願ふに足らず。(第三十八段)

二五 ある人法然上人に

ある人法然^二上人に、念佛の時ねぶりにおかされて、行を怠り侍ること、いかゞしてこのさはりをやめ侍らむ」と申しければ、「目の覺めたらむほど念佛したまへ」と答へられける、いとたふとかりけり。

二 名は源空、淨土宗の開祖。建曆二年歿。年八十。

また、往生は一定と思へば一定、不定と思へば不定なり。」といはれけり。これもたふとし。また疑ひながらも、念佛すれば往生す。」ともいはれけり。これも亦たふとし。(第三十九段)

二六 五月五日賀茂の競馬を

五月五日、賀茂の競馬^{くらま}を見侍りしに、車の前に雜人立ちへだてて見えざりしかば、おのゝ下りて埒のきはに寄りたれど、ことに人多く立ちこみて、わけ入りぬべきやうもなし。かゝる折に、向ひなるあふちの木に、法師ののぼりて、木のまたについゐるもの見るあり。取りつきながらいたうねぶりて、落ちぬべき時に目をさますことたびゝなり。これを見る人、嘲りあざみて、「世のしれものかな。かく危き枝の上にて、安き心ありてねぶるらむよ。」といふに、わが心にふと思ひしまゝに、われらが生死の到來たゞ今にもやあら

む。それを忘れてもの見て日をくらす、おろかなることはなほまさりたるものを。といひたれば、前なる人ども、まことにさにこそ候ひけれ。最もおろかに候。といひて、皆うしろを見かへりて、「こゝへ入らせ給へ。」とて、ところを去りて呼び入れ侍りにき。かほどのことわり、誰かは思ひ寄らざらむなれども、折からの思ひかけぬこゝちして、胸にあたりけるにや。人木石〔二〕にあらねば、時にとりて物に感ずることなきにあらず。(第四十一段)

〔二〕人非木石皆有情。白氏文集

二七 春の暮つ方

春の暮つ方のどやかに艶なる空に、賤しからぬ家の、奥ふかく、木立ものふりて、庭に散りしをれたる花見、すぐしがたきを、さし入りて見れば、南面の格子皆下してさびしげなるに、東にむきて妻戸のよきほどにあきたる御簾のやぶれより見れば、かたち清げなる男

の、年二十ばかりにて、うちとけたれど、心にくゝのどやかなる様して、机の上に書をくりひろげて見居たり。いかなる人なりけむ。たづね聞かまほし。(第四十三段)

二八 あやしの竹の編戸のうちより

あやしの竹の編戸のうちより、いと若き男の、月影に色合さだかならねど、つやゝかなる狩衣に、濃き指貫、いとゆゑづきたるさまにて、さゝやかなる童一人を具して、はるかなる田の中の細道を、稲葉の露にそぼちつゝ、分け行くほど、笛をえならず吹きすさびたる、あはれと聞き知るべき人もあらじと思ふに、行かむかた知らまほしくて、見おくりつゝ、行けば、笛を吹きやみて、山の際に惣門のあるうちに入りぬ。

榻に立てたる車の見ゆるも、都よりは目とまる心地して、下人に

問へば、しかるの宮のおはします頃にて、御佛事などさぶらふにや。といふ。御堂の方に、法師ども参りたり。夜寒の風にさそはれくる空薫物の匂も、身にしむ心地す。寢殿より、御堂の廊にかよふ女房の追風用意など、人目なき山里ともいはず、心づかひしたり。心のまゝにしげれる秋の野らは、おきあまる露に埋もれて、蟲の音かごとがましく、遣水の音のどやかなり。都の空よりは雲のゆききも早き心地して、月の晴れ曇ること定めがたし。(第四十四段)

二九 公世の二位のせうと

公世の二位のせうとに、良覺僧正と聞えしは、極めて腹あしき人なりけり。坊の傍に大きな榎のありければ、人「榎の僧正」とぞいひける。この名しかるべからずとて、かの木を伐られにけり。その根のありければ、きりくひの僧正といひけり。いよく腹立ち

〔一〕從二位待從藤原公世。
〔二〕叡山の大僧正。

て、きりくひを掘りすてたりければ、その跡大きな堀にてありければ、「堀池の僧正」とぞいひける。(第四十五段)

三〇 老來りて始めて

老來りて、始めて道を行ぜむと待つことなかれ。古き塚、多くはこれ少年の人なり。はからざるに病を受けて、忽ちにこの世を去らむとする時にこそ、はじめて過ぎぬる方のあやまれる事は知らるれ。あやまりといふは他の事にあらず。速かにすべき事を緩くし、緩くすべきことを急ぎて、過ぎにし事の悔しきなり。その時悔ゆともかひあらむや。(第四十九段)

三一 應長の頃

應長の頃伊勢國より、女の鬼になりたるをみて上りたりといふ

〔一〕莫待老來、方學道、古墳多是少年人(古詩)

〔二〕花園天皇の御代の年號

三 老來りて始めて

三 應長の頃

三

〔一〕京都賀茂川以東の地。

〔二〕今の金閣寺の地にあつたもので、元來西園寺家の第宅であつた。

〔三〕院御所。

〔四〕京都の北郊、愛宕郡にあつた。

ことありて、その頃二十日ばかり、日毎に京、白川の人、鬼見にとて出でまどふ。「昨日は西園寺にまゐりたりし。今日は院へまゐるべし。たゞ今はそこ〜に、などいひあへり。まさしく見たりといふ人もなく、そらごとといふ人もなし。上下たゞ鬼のこののみいひやまず。」

その頃、東山より安居院邊へまかり侍りしに、四條よりかみざまの人、皆北をさして走る。一條室町に鬼ありとのゝしりあへり。今出川の邊より見やれば、院の御棧敷のあたり、更に通り得べうもあらず、たちこみたり。はやく迹なき事にはあらざめりとて、人を作りて見するに、大方あへるものなし。暮るゝまでかく立ちさわぎて、はては鬨諍おこりて、あさましきことどもありけり。その頃おしなべて、二日三日人のわづらふこと侍りしをぞ、かの鬼の虚言は、このしるしを示すなりけり。」といふ人も侍りし。(第五十段)

三三 龜山殿の御池に

〔一〕山城國葛野郡龜山の麓にあつた龜山上皇の離宮
〔二〕源を丹波に發し、淀川に注ぐ。嵐山の麓で大堰川といひ、下流は桂川といふ。
〔三〕山城國久世郡、宇治川の沿岸で水車の名所。
〔四〕京都市右京區御室大内町にある眞言宗の本山。
〔五〕山城國綾喜郡石清水八幡宮、官幣大社。
〔六〕男山の麓にあつた攝社。極樂寺は今失はれ、高良は今も高良社といふ。

龜山殿の御池に、大堰川の水をまかせられむとて、大堰の土民に仰せて、水車を作らせられけり。多くのあしを賜ひて、數日にいとなみ出してかけたりけるに、大かためぐらざりければ、とかくなほしけれども、遂にまはらで、徒に立てりけり。さて宇治の里人を召して、こしらへさせられければ、やすらかにゆひて參らせたりけるが、思ふやうにめぐりて、水を汲み入るゝことめでたかりけり。よろづにその道を知れるものは、やんごとなきものなり。(第五十一段)

三三 仁和寺にある法師

仁和寺にある法師、年寄るまで石清水を拜まざりければ、心憂くおぼえて、ある時思ひたちて、たゞひとりかちより詣でけり。極樂

寺・高良など拜みて、かばかりと心得てかへりにけり。さてかたへの人にあひて、年頃思ひつる事果し侍りぬ。聞きしにも過ぎて、たふとくこそおはしけれ。そも参りたる人ごとに、山へ登りしは何ごとかありけむ、ゆかしかりしかど、神へ参るこそ本意なれと思ひて、山までは見ず。」とぞいひける。すこしの事にも先達はあらまほしきわざなり。(第五十二段)

三四 これも仁和寺の法師

これも仁和寺の法師、童の法師にならむとする名残とて、おのの遊ぶことありけるに、酔ひて興に入るあまり、かたはらなる足鼎を取りて頭にかづきたれば、つまるやうにするを、鼻をおしひらめて、顔をさし入れて、舞ひ出でたるに、満座興に入ること限りなし。しばしかなでて後、抜かむとするに、大かた抜かれず。酒宴こと

さめていかゞはせむとまどひけり。とかくすれば頸のまはりかけて、血たりたゞはれにはれみちて、息もつまりければ、うちわらむとすれど、たやすくわれず。響きて堪へ難かりければ、かなはですべきやうなくて、三足なる角の上にかたびらをうちかけて、手を引き杖をつかせて、京なる醫師のがりゐて行きけるに、道すがら人の怪しみ見ること限なし。醫師のもとにさし入りて、對ひ居たりけむ有様、さこそ異様なりけめ。ものをいふもくゞもり聲に響きて聞えず。「かゝる事は書にも見えず、傳へたる教もなし。」といへば、また仁和寺にかへりて、親しきもの、老いたる母など、枕がみに寄りゐて泣き悲しめども、聞くらむともおぼえず。

かゝるほどに、あるものいふやう、たとひ耳鼻こそ切れ失すとも、命ばかりはなどか生きざらむ。たゞ力を立てて引きたまへ。」とて、藁のしべをまはりにさし入れて、かねを隔てて、頸もちぎるゝば

かり引きたるに、耳鼻かけうげながらぬけにけり。からき命まうけて、久しく病みゐたりけり。(第五十三段)

三五 御室にいみじき兒の

御室にいみじき兒のありけるを、いかで誘ひ出して遊ばむとたくむ法師どもありて、能あるあそび法師どもなどかたらひて、風流の破籠やうのもの、ねんごろにいとなみ出でて、箱風情のものにしたゝめ入れて、^三雙の岡の便よき所にうづみおきて、紅葉ちらしかけなど、思ひよらぬさまにして、御所へ参りて、兒をそゝのかし出でてにけり。

嬉しと思ひて、こゝかしこ遊びめぐりて、ありつる苔の筵になみゐて、いたうこそこうじにたれ。あはれ、紅葉を焼かむ人もがな。しるしあらむ僧たち、いのり試みられよ。などいひしろひて、埋みつ

^三 京都市右京區御室大内町。仁和寺の南にあたる。

^三 林間煖、酒燒、紅葉、石上題、詩抄、綠苔。(白氏文集)

る木のもとに向きて、珠數おしすり、印ことくしく結びいでなどして、いらなくふるまひて、木の葉をかきのけたれど、つやくものも見えず。所の違ひたるにやとて、掘らぬ所もなく、山をあされども、無かりけり。埋みけるを人の見おきて、御所へ参りたる間に、盗めるなりけり。法師ども言の葉なくて、聞きにくく、いさかひ腹だちて歸りにけり。あまり興あらむとすることは、必ずあいなきものなり。(第五十四段)

三六 久しく隔たりて逢ひたる人

久しく隔たりて逢ひたる人の、わが方にありつること、かす／＼に残りなく語りつゞくるこそあいなけれ。隔てなくなれぬ人も、程へて見るは恥かしからぬかは。次ぎまの人は、あからさまにたち出でて、もけふありつることとて、息もつきあへず語り興ずる

ぞかし。よき人の物語するは、人あまたあれど、一人に向きていふを、おのづから人も聞くにこそあれ。よからぬ人は誰ともなく、あまたの中らうち出でて、見ることのやうに語りなせば、皆同じく笑ひのゝしる、いとらうがはし。をかしきことをいひてもいたく興ぜぬと、興なきことをいひてもよく笑ふにぞ、品のほどは量られぬべき。人の見さまのよしあし、才ある人はその事など定めあへるに、おのが身に引きかけていひ出でたる、いとわびし。(第五十六段)

三七 大事を思ひ立たむ人

大事を思ひ立たむ人は、去り難く心にかゝらむことの本意を遂げずして、さながら棄つべきなり。しばし、この事果てて、同じくはかの事沙汰し置きて、しかじかの事、人の嘲やあらむ、行末難なく認めまうけて、年ごろもあればこそあれ、その事待たむ程あらじ、物騒

がしからぬやうに、など思はむには、えさらぬ事のみいと重なりて、事の盡くる限もなく、思ひ立つ日もあるべからず。おほやう人を見るに、少し心あるきは、皆このあらましにて、ぞ一期は過ぐめる。近き火などに逃ぐる人は、しばしとやいふ。身を助けむとすれば、恥をも顧みず、財をも捨てて遁れ去るぞかし。命は、人を待つものか。無常の來る事は、水火の攻むるよりも速かに、遁れ難きものを、其の時、老いたる親いとけなき子、君の恩、人の情、棄てがたしとて棄てざらむや。(第五十九段)

三八 眞乗院に盛親僧都とて

眞乗院に、盛親僧都とてやんごとなき智者ありけり。芋頭といふものを好み、多く食ひけり。談義の座にても、大きな鉢にうづたかく盛りて、膝もとにおきつゝ、食ひながら書をも讀みけり。

〔一〕仁和寺に附屬した寺。

煩ふことあるには、七日・二七日など、療治とてこもり居て、思ふやうによき芋頭をえらびて、ことに多く食ひて、よろづの病をいやしけり。人に食はすることなし。たゞ一人のみぞ食ひける。極めて貧しかりけるに、師匠死にざまに、錢二百貫と坊ひとつを譲りたりけるを、坊を百貫に賣りて、かれこれ三萬疋を芋頭のあしと定めて、京なる人にあづけおきて、十貫づつ取りよせて、芋頭をともしからずめしけるほどに、またことようにも用ふる事なくして、そのあし皆になりけり。三百貫のものを貧しき身にまうけて、かくはからひける、誠にありがたき道心者なりとぞ入申しける。

この僧都、或法師を見て、「しろうるり」といふ名をつけたりけり。「とは何ものぞ」と、人の問ひければ、「さるものをわれも知らず。もしあらましかば、この僧の顔に似てむ」とぞいひける。この僧都みめよく、力つよく、大食にて、能書・學匠・辯説人にすぐれて、宗の法燈なれ

ば、寺中にも重く思はれたりけれども、世を軽く思ひたる曲者にて、よろづ自由にして、おほかた人に従ふといふことなし。

出仕して饗膳などにつく時も、皆人の前すゑわたすを待たず、我が前にすゑぬれば、やがてひとりうち食ひて、歸りたければ、ひとりついたちて行きけり。とき、非時も人にひとしく定めて食はず、我が食ひたき時、夜中にも、曉にも食ひて、ねぶたければ、晝もかけこもりて、いかなる大事あれども、人のいふこと聞き入れず。目さめぬれば、幾夜もいねず、心をすまして、うそぶきありきなど、世の常ならぬ様なれども、人にいとはれず、よろづ許されけり。徳のいたれりけるにや。(第六十段)

三九 書寫の上人は

書寫の上人は、法華讀誦の功つもりて、六根淨にかなへる人なり

〔一〕名は性空。播磨國書寫山圓教寺の開基。寛弘四年歿。年八十。

けり。旅の假屋に立ち入られけるに、豆の殻を焚きて、豆を煮ける音のつぶくと鳴るを聞き給ひければ、疎からぬおのれらしもうらめしく我をば煮て、からき目を見するものかな。といひけり。焚かるゝ豆がらの、はらくと鳴る音は、わが心よりする事かは。焼かるゝはいかばかり堪へ難けれども、力なき事なり。かくな恨み給ひそ。」とぞ聞えける。(第六十九段)

四〇 名を聞くより

名を聞くよりやがて面影は推量らるゝ心地するを見る時はまた、かねて思ひつる儘の顔したる人こそなけれ。昔物語を聞きても、この頃の人の家の、そこほどにてぞありけむと覚え、人も今見る人の中に思ひよそへらるゝは、誰もかく覺ゆるにや。又いかなる折ぞ、たゞ今、人のいふことも、目に見ゆるものも、わが心の中も、かゝ

ることのいつぞやありしがと覺えて、いつとは思ひ出でねども、正しくありし心地のするは、我ばかりかく思ふにや。(第七十一段)

四一 いやしげなるもの

いやしげなるもの。居たるあたりに調度の多き、硯に筆の多き、持佛堂に佛の多き、前栽に石・草木の多き、家の中に子孫の多き、人にあひて言葉の多き、願文に作善よせ多く書き載せたる。多くて見苦しからぬは、文車の文塵塚の塵。(第七十二段)

四二 世に語り傳ふること

世に語り傳ふること、まことはあいなきにや、多くは皆そらごとなり。あるにも過ぎて人はものをいひなすに、まして年月過ぎ、境も隔たりぬれば、いひたきまゝに語りなして、筆にも書きとゞめぬ

れば、やがて定まりぬ。

道々のものの上手のいみじきことなど、かたくななる人の、その道知らぬは、そゞろに神の如くにいへども、道知れる人は更に信も起さず。音に聞くと見る時とは、何事もかはるものなり。

かつあらはるゝをも願みず、口に任せていひちらすは、やがてうきたることと聞ゆ。又われもまことしからずは思ひながら、人のいひしまゝに鼻のほどを、ごめきていふは、その人のそらごとにはあらず。げにくしく、所々うちおぼめき、よく知らぬ由して、さりながらつまく、あはせて語るそらごとは、おそろしきことなり。わがため面目あるやうにいはれぬるそらごとは、人いたくあらがはず。皆人の興ずるそらごとは、ひとり、さもなかりしものを、といはむも詮なくて、聞きあたるほどに、證人にさへなされて、いと定まりぬべし。

〔子不語怪力亂神〕(論語)

とにもかくにもそらごと多き世なり。たゞ常にある、めづらしからぬことのまゝに心得たらむ、よろづ違ふべからず。下さまの人の物語は、耳驚くことのみあり。よき人はあやしきことを語らず。かくはいへど、佛神の奇特權者の傳記、さのみ信ぜざるべきにもあらず。これは世俗のそらごとを懇ろに信じたるもおこがましくし、よもあらじ、などいふも詮なければ、大方はまことしくあひしらひて、ひとへに信せず、また疑ひ嘲るべからず。(第七十三段)

四三 蟻の如くに集まりて

蟻の如くに集まりて、東西に急ぎ、南北にわしる。高きあり、賤しきあり、老いたるあり、若きあり、行く處あり、歸る家あり。夕にいねて朝に起く。營む所何事ぞや。生を貪り、利を求めて止む時なし。身を養ひて何事をか待つ。期する所、たゞ老と死とにあり。その

來る事速かにして、念々の間に止まらず。これを待つ間、何の樂かあらむ。惑へる者はこれを恐れず。名利に溺れて、先途の近きことを顧みねばなり。おろかなる人はまたこれを悲しむ。常住ならむことを思ひて、變化の理を知らねばなり。(第七十四段)

四四 世のおぼえ花やかなる

世のおぼえ花やかなるあたりに、なげきも喜もありて、人多く行きとぶらふなかに、ひじり法師のまじりて、いひ入れたゝみたるこそ、さらずともと見ゆれ。さるべき故ありとも、法師は人にうとくてありなむ。(第七十六段)

四五 今やうの事どもの

今やうの事どものめづらしきを、いひひろめもてなすこそ、また

うけられね。世にことふりたるまで知らぬ人は心にくし。今さらの人などある時、こゝもとにいひつけたることぐさ、もの名など、心得たるどち、かたはしいひかはし、目見あはせ笑ひなどして、心しらぬ人にこころえず思はすること、世なれずよからぬ人の必ずあることなり。(第七十八段)

四六 何事も入りたゝぬさま

何事も入りたゝぬさましたるぞよき。よき人はしりたる事とて、さのみ知り顔にやはいふ。片田舎よりさしいでたる人こそ、萬の道に心得たるよしのさしいらへはすれ。されば世にはづかしきかたもあれど、自らもいみじと思へるけしきかたくななり。よく辨へたる道にはかならず口おもく、問はぬかぎりはいはぬこそいみじけれ。(第七十九段)

四七 屏風障子などの繪

屏風・障子などの繪も文字も、かたくななる筆様して書きたるが見にくきよりも、宿のあるじの拙くおぼゆるなり。大方もてる調度にて、心おとりせらるゝことはありぬべし。さのみよきものをもつべしとにもあらず。損せざらむためとて、品なく見にくきさまにしなし、めづらしからむとて用なきことどもし添へ、煩はしく好みなせるをいふなり。ふるめかしき様に、いたくことごとくしからず、費もなく、ものからのよきがよきなり。(第八十一段)

四八 うすものの表紙は

「うすものの表紙は、とく損ずるがわびしき。」と人のいひしに、頼阿〔一〕が「うすものはかみしもはづれ、螺鈿の軸は貝おちて後こそいみじ

〔一〕俗名二階堂貞宗。二條爲世の門人で、兼好、淨辨、慶運の三人と併せて、當時和歌の四天王と稱せられた。

〔一〕伊賀國佛生寺通昭院の住僧。兼好と同時代の歌人。

けれ。」と申し侍りしこそ、心まさりておぼえしか。一部とある草紙などの、同じやうにもあらぬを見にくしといへど、弘融僧都が「ものを必ず一具にとゝのへむとするは、拙きものすることなり。不具なるこそよけれ。」といひしのみじくおぼえしなり。

すべて何も皆、こととのほりたるは、あしきことなり。し残したるを、さてうちおきたるは、おもしろく、生きのぶるわざなり。「内裏造らるゝにも、必ず造りはてぬ所を残すことなり。」とある人申し侍りしなり。先賢のつくれる内外の文にも、章段のかけたるところのみぞ侍る。(第八十二段)

四九 法顯三藏

法顯〔一〕三藏の、天竺にわたりて、故郷の扇を見ては悲しび、病に臥しては漢の食を願ひ給ひけることを聞きて、さばかりの人のむげに

〔一〕龔氏。支那晋代の高僧。安帝の隆安三年に天竺に渡つた。

こそこゝろよわきけしきを、人の國にて見え給ひけれ。」と人のいひしに、弘融僧都「優になさけありける三藏かな。」といひたりしこそ、法師のやうにもあらず、心にくゝおぼえしか。(第八十四段)

五〇 人の心すなほならねば

人の心すなほならねば、偽なきにしもあらず。されどおのづから正直の人などかなからむ。おのれすなほならねど、人の賢を見て羨むは世の常なり。至りておろかなる人は、たまゝ賢なる人を見てこれをにくむ。「大きな利を得むがために、少しきの利を受けず。偽りかざりて名を立てむとす。」とそしる。おのれが心に違へるによりて、このあざけりをなすにて知りぬ。この人は、下愚〔三〕の性うつるべからず、いつはりて小利をも辭すべからず。かりにも愚を學ぶべからず。狂人〔三〕のまねとて、大路を走らば、すなはち狂

〔三〕唯上知、與下愚不移。(論語)

〔三〕狂人走、不狂人走。(禪語)

〔三〕唯驥之馬、亦驥之乘也、唯顔之人、亦顔之徒也。(揚子法言)

人なり。悪人のまねとて、人を殺さば、悪人なり。驥〔三〕をまなぶは驥のたぐひ、舜をまなぶは舜の徒なり。偽りても賢をまなばむを賢といふべし。(第八十五段)

五一 下部に酒飲ますること

下部に酒飲ますことは心すべきことなり。宇治にすみける男、京に具覺房とて、なまめきたる遁世の僧を、小舅なりければ、常に申しむつびけり。ある時むかへに馬をつかはしたりければ、「はるかなるほどなり、口つきの男に、まづ一度せさせよ。」とて、酒をいだしたれば、さしうけくよゝとのみぬ。太刀うちはきてかひくしげなれば、たのもしくおぼえて、召し具して行くほどに、木幡〔三〕のほとりにて、奈良法師の兵士あまた具してあひたるに、この男たちむかひて、「日暮れにたる山中にあやしきぞ、とまり候へ。」といひて、太刀を

〔三〕山城國宇治郡。

ひきぬきければ、人もみな太刀ぬき、矢はげなどしけるを、具覺房手をすりて、うつし心なく、酔ひたるものに候。まげてゆるし給はらむ。」といひければ、おのゝあざけりて過ぎぬ。この男、具覺房にあひて、「御坊は口惜しきことしたまひつるものかな。おのれ酔ひたること侍らず。高名仕らむとするを、抜ける太刀空しくなし給ひつること。」と怒りて、ひた切りに切りおとしつ。さて、「山だちあり。」とのゝしりければ、里人おこりて出であへば、「われこそ山だちよ。」といひて、走りかゝりつゝ、切りまはりけるを、あまたして手おはせ、うちふせて、しばりけり。馬は血つきて、宇治大路の家にはしり入りたり。あさましくて、をのこどもあまた走らかしたれば、具覺房はくちなしはらにによび伏したるを求め出でて、昇きもて來つ。からき命生きたれど、腰斬り損ぜられて、かたはになりけり。

(第八十七段)

五二 あるもの小野道風の

あるもの、^三小野道風の書ける和漢朗詠集とてもちたりけるを、ある人、御相傳、うける事には侍らじなれども、^四四條大納言撰ばれたる物を、道風書かむこと、時代やたがひ侍らむ。おぼつかなくこそ、^一といひければ、「さ候へばこそ、世にありがたきものには侍りけれ。」とていよゝゝ祕藏しけり。(第八十八段)

五三 奥山に猫またといふもの

「奥山に猫またといふものありて、人をくらふなる。」と人のいひけるに、「山ならねども、これらにも、猫のへあがりて、猫又になりて人とする事はあなるものを。」といふものありけるを、何阿彌陀佛とかや、連歌しける法師の、^四行願寺のほとりにありけるが聞きて、ひとりあり

〔一〕能書家。三蹟の一人。康保三年歿。
〔二〕二卷。朗詠に歌ふ和漢の名詩歌を集めたもの。藤原公任の撰といふ。
〔三〕藤原公任。歌人。能書家。村上天皇の康保三年に生れた。

〔四〕京都一條油小路にあつた寺で、俗に革堂といつた。

かむ身は、心すべきことにこそと思ひけるころしも、ある所にて夜更くるまで連歌して、たゞひとり歸りけるに、小川のはたにて、晋に聞きし猫又、あやまたず足もとへふと寄り来て、やがてかきつくまに、頸のほどをくはむとす。きもこゝろも失せて、防がむとするに力もなく、足も立たず。小川へころび入りて、たすけよや、猫又。よや、よや。」と叫べば、家々より松どもともして走り寄りて見れば、このわたりに見知れる僧なり。「こはいかに。」とて川の中よりいただき起したれば、連歌のかけもの取りて、扇・小箱などふところを持ちたりけるも、水に入りぬ。希有にして、たすかりたるさまにて、はふはふ家に入りけり。飼ひける犬の、暗けれど主を知りて、飛びつきたりけるとぞ。(第八十九段)

五四 ある人弓射ることを

ある人、弓射ることをならふに、もろ矢をたばさみて的に向ふ。師のいはく、「初心の人二つの矢をもつことなかれ。後の矢をたのみて、初の矢になほざりの心あり。毎度たゞ得失なく、この一矢に定むべしと思へ。」といふ。わづかに二つの矢、師の前にて一つをおろそかにせむと思はむや。懈怠の心、みづから知らずといへども、師これを知る。このいましめ、萬事にわたるべし。道を學する人、夕には朝あらむことを思ひ、朝には夕あらむことを思ひて、重ねてねんごろに修せむことを期す。いはむや、一刹那のうちにおいて、懈怠の心あることを知らむや。何ぞ、たゞ今の一念において、たゞちにすることの甚だ難き。(第九十二段)

五五 牛を賣るもの

牛を賣るものあり。買ふ人、「あすその價をやりて牛を取らむ。」と

いふ。夜のまに牛死にぬ。買はむとする人に利あり、賣らむとする人に損あり。」と語る人あり。これを聞きてかたへなる者のいはく、「牛の主まことに損ありといへども、又大いなる利あり。その故は、生あるもの死の近きことを知らざること、牛既にしかなり。人亦同じ。はからざるに牛は死し、はからざるに主は存せり。一日の命萬金よりも重し。牛の價鷲毛よりも輕し。萬金を得て一錢を失はむ人、損ありといふべからず。」といふに、みな人あざけりて、「その理は牛の主に限るべからず。」といふ。

またいはく、「されば人死をにくまば、生を愛すべし。存命のよろこび日々に樂しまざらむや。おろかなる人このたのしみを忘れて、いたつがはしく外のたのしみを求め、この財を忘れて、危く他の財を貪るには、志滿つることなし。生ける間、生を樂しまずして、死に臨みて、死を恐れば、この理あるべからず。人皆生を樂しまざる

は、死を恐れざる故なり。死を恐れざるにはあらず、死の近きことを忘るゝなり。もし又生死の相にあづからずといはば、まことの理を得たりといふべし。」といふに、人いよく嘲る。(第九十三段)

五六 尊きひじりの

尊きひじりのいひおきけることを書きつけて一言芳談とかや名づけたる草紙を見侍りしに、心にあひて覺えし事ども、

- 一、しやせまし、せずやあらましと思ふことは、おほやうは、せぬはよきなり。
- 一、後世を思はむものは、糶杖瓶ひとつも持つまじきことなり。持經、本尊にいたるまで、よきものを持つ、よしなきことなり。
- 一、遁世者は、なきに事かけぬやうをはからひて過ぐる、最上のやうにてあるなり。

一、上藹は下藹になり、智者は愚者になり、徳人は貧になり、能ある人は無能になるべきなり。

一、佛道を願ふといふは、別のことなし。暇ある身になりて、世のことを心にかけぬを第一の道とす。

この外もありし事ども覺えず。(第九十八段)

五七 寸陰惜しむ人なし

寸陰惜しむ人なし。これよく知れるか、おろかなるか。おろかにして怠る人のためにいはゞ、一錢輕しといへども、これを重ねれば、貧しき人を富める人となす。されば商人の一錢を惜しむ心切なり。刹那おぼえずといへども、これをはこびてやまざれば、命を終ふる期たちまちに至る。されば道人は、遠く日月を惜しむべからず。ただ今の一念空しく過ぐることを惜しむべし。

もし人來りて、「わが命あすは必ず失はるべし」と告げ知らせたらむに、けふの暮るゝ間、何事をか頼み、何事をかいとなまむ。われらが生けるけふの日、何ぞその時節に異ならむ。一日の中に飲食おんじき便利、睡眠、言語、行歩、やむことを得ずして多くの時を失ふ。そのあまりの暇いくばくならぬうちに、無益のことをなし、無益のことをいひ、無益のことを思惟して、時を移すのみならず、日を消し、月をわたりて一生を送る、最もおろかなり。(第百八段)

五八 高名の木のぼり

高名の木のぼりといひし男、人を掟て、高き木にのぼせて、梢を切らせしに、いとあやぶく見えしほどは、いふこともなくて、おるゝ時に、軒たけばかりになりて、「あやまちすな。心しておりよ。」とことばをかけ侍りしを、「かばかりになりては、飛びおるともおりなむ。」

いかにかくはいふぞ。」と申し侍りしかば、その事に候。目くるめき枝あやふきほどは、おのれがおそれ侍れば申さず。過はやすき所になりて必ず仕ることに候。」といふ。あやしき下藤なれども、聖人のいましめにかなへり。鞠も、難き所を蹴出して後、やすく思へば必ず落つると侍るやらむ。(第百九段)

五九 雙六の上手といひし人に

雙六の上手といひし人に、そのてだてを問ひ侍りしかば、勝たむとうつべからず、負けじとうつべきなり。いづれの手かたく負けぬべきと案じて、その手をつかはずして、一目なりとも遅くまくべき手につくべし。」といふ。道を知れるをしへ、身を修め國を保たむ道もまたしかなり。(第百十段)

六〇 明日は遠國へ

明日は遠國へ赴くべしと聞かむ人に、心しづかになすべからむわざをば、人いひかけてむや。俄の大事をもいとなみ、切になげくこともある人は、他の事を聞き入れず、人の愁喜をも問はず。問はずとて、などやと恨むる人もなし。されば、年もやう／＼たけ、病にもまつはれ、況や世を遁れたらむ人、亦これに同じかるべし。

人間の儀式、いづれの事か去りがたからぬ。世俗の黙しが、たきに從ひて、これをかならずとせば、願も多く、身も苦しく、心の暇もなく、一生は雑事の小節にさへられて、空しく暮れなむ。日暮れ途遠し。吾生既に蹉跎たり。諸縁を放下すべき時なり。信をも守らじ、禮儀をも思はじ。この心をも得ざらむ人は、ものぐるひともいへ、うつつなし、情なしともおもへ。そしるとも苦しまじ、譽むとも

〔一〕日暮而途遠、吾生已蹉跎。(白樂天)

聞きいれじ。(第百十二段)

六一 宿河原といふ所にて

〔一〕一説に、武藏國橋樹郡
稻田村にあると。

宿河原といふ所にて、ぼろ／＼多くあつまりて、九品の念佛を申しけるに、外より入りくるぼろ／＼の、もしこの御中に、いろをしごと申すぼろやおはします。」と尋ねければ、その中より、いろをしごと候。かくのたまふは誰ぞ。」と答ふれば、「しら梵字と申す者なり。おのれが師なにがしと申し、人、東國にていろをしと申すぼろに殺されけりと承りしかば、その人に逢ひ奉りて、うらみ申さばやと思ひて、尋ね申すなり。」といふ。いろをし、ゆゑしくも尋ねおはしたり。さること侍りき。こゝにて對面し奉らば、道場を汚し侍るべし。前の河原へまゐりあはむ。あなかしこ、わきざしたち、いづ方をもみつぎ給ふな。數多のわづらひにならば、佛事のさまたげに

侍るべし。」といひ定めて、二人河原へ出であひて、心ゆくばかりに貫きあひて共に死ににけり。

ぼろ／＼といふもの昔はなかりけるにや。近き世に、ぼろんじ。梵字漢字などいひける者、そのはじめなりけるとかや。世を捨てたるに似て我執ふかく、佛道を願ふに似て鬪諍を事とす。放逸無慚のありさまなれども、死を軽くして少しもなづまざる方のいさぎよく覺えて、人の語りしまゝに書きつけ侍るなり。(第百十五段)

六二 養ひ飼ふものには

養ひ飼ふものには馬牛、つなぎ苦しむるこそいたましけれど、なくてかなはぬものなれば、いかゞはせむ。犬はまもりふせぐつとめ、人にもまさりたれば、必ずあるべし。されど家ごとにあるものなれば、ことさらに、求め飼はずともありなむ。その外の鳥獸すべ

〔一〕夏の桀王。殷の紂王。共に支那古代の無道の君。
 〔二〕晋時代の人。書道の大作家王羲之の子。
 〔三〕珍禽奇獸、不_レ育_二于國_一。(書經)

て用なきものなり。走る獸は、檻に籠め、鎖をさゝれ、飛ぶ鳥は、翼を切り、籠に入れられて、雲を戀ひ、野山を思ふ愁、やむ時なし。そのおもひわが身に當りて、忍び難くば、心あらむ人、これを樂しまむや。生を苦しめて、目をよろこばしむるは、桀紂^{〔一〕}が心なり。王子猷^{〔二〕}が鳥を愛せしは、林に樂しぶを見て、逍遙の友としき。捕へ苦しめたるには、あらず。およそ、珍^{〔三〕}しき禽あやしき獸、國に養はず。とこそ書にも侍るなれ。(第百二十一段)

六三 人の才能は

人の才能は、文あきらかにして、聖の教を知れるを第一とす。次には、手かく事、むねとすることはなくとも、これを習ふべし。學問にたより、あらむためなり。次には、醫術を習ふべし。身を養ひ、人を助け、忠孝のつとめも、醫にあらざば、あるべからず。次に、弓、馬

〔一〕禮樂射御書數。

〔二〕夫食_レ爲_二人_一、天_レ、農_レ爲_二政_一、本_一。(書經)

に乗ること、六藝^{〔一〕}に出せり。必ずこれをうかぶべし。文、武、醫の道、まことに缺けては、あるべからず。これを學ばむをば、いたづらなる人といふべからず。次に、食^{〔二〕}は人の天なり。よく味を調へ、知れる人、大いなる徳とすべし。次に、細工、よろづに用多し。この外の事ども、多能は君子の恥づるところなり。詩歌にたくみに、絲竹に妙なるは、幽玄の道、君臣これを重くすといへども、今の世には、これをもちて世を治むること、やうやくおろかなるに似たり。金^{〔三〕}はすぐれたれども、鐵^{〔四〕}の益多きに、如かざるがごとし。(第百二十二段)

六四 無益のことをなして

無益のことをなして、時を移すを、おろかなる人とも、僻事する人ともいふべし。國のため、君のために、やむことを得ずして、なすべきこと多し。そのあまりのいとま、いくばくならず、思ふべし。人

の身に、やむ事を得ずしていとなむ所第一に食物、第二に著る物、第三に居る所なり。人間の大事、この三つには過ぎず。飢ゑず、寒か
らず、風雨におかされずして、静かにすごすを樂とす。たゞし人皆
病あり。病におかされぬれば、その愁忍び難し。醫療を忘るべか
らず。藥を加へて、四つのこと求め得ざるを貧しとす。この四つ
缺けざるを富めりとす。この四つの外をもとめいとなむを驕と
す。四つのこと儉約ならば、誰の人か足らずとせむ。(第百二十三段)

六五 雅房大納言は

〔一〕 雅房大納言は、才かしく、よく人にて、大將にもなさばやとおぼ
しける頃、院の近習なる人、たゞいまあさましきことを見侍りつ。と
申されければ、「何事ぞ」と問はせたまひけるに、「雅房卿、鷹にかはむと
て、生きたる犬の足を切り侍りつるを中垣の穴より見侍りつ」と申

〔一〕 太政大臣源定實の子。
乾元元年歿。年四十一。
〔二〕 後宇多上皇。

されけるに、うとましく、にくくおぼしめして、日頃の御氣色もたが
ひ、昇進もしたまはざりけり。さばかりの人、鷹をもたれたりける
は、思はずなれど、犬の足はあとなき事なり。そらごとは不便なれ
ども、かゝることを聞かせ給ひて、にくませ給ひける君の御心は、い
とたふとき事なり。

おほかた生けるものを殺し、いためた、かはしめて遊び樂しま
む人は、畜生殘害のたぐひなり。よろづの鳥獸、小き蟲までも、心を
とめてありさまを見るに、子を思ひ、親をなつかしくし、夫婦をとも
なひ、ねたみ、怒り、欲多く、身を愛し、命を惜めること、ひとへに愚痴な
るゆゑに、人よりもまさりて甚し。かれにくるしみを興へ、命を奪
はむこと、いかでかいたましからざらむ。すべて一切の有情を見
て、慈悲の心なからむは、人倫にあらず。(第百二十八段)

〔一〕孔子の高弟。世に亞聖といふ。
 〔二〕顔淵曰、願無伐善、無施勞。(論語)
 〔三〕三軍可奪帥、匹夫不可奪志。(論語)

〔四〕夫服藥求汗、或有弗獲、而愧情一集、渙然流離。(文選)

六六 顔回は

顔回は、志人に勞をほどこさじとなり。すべて人を苦しめ、ものを虐ぐること、いやしき民の志をも奪ふべからず。又いときな子をすかしおどし、いひはづかしめて興ずる事あり。おとなしき人は、まことならねば、ことにもあらず思へど、をさなき心には、身にしみておそろしく、恥かしく、あさましき思、まことに切なるべし。これをなやまして興ずること、慈悲の心にあらず。おとなしき人の喜び、怒り、悲しび、樂しぶも、皆虚妄なれども、誰か實有の相に著せざる。身をやぶるよりも、心をいたましむるは、人をそこなふことなほ甚し。病を受くることも、多くは心より受く。外より來る病は少し。藥を飲んで汗を求むるには、しるしなきことあれども、一旦恥ぢ恐るゝことあれば、必ず汗を流すは、心のしわざなりといふ

〔一〕魏明帝立、凌雲觀。誤先釘榜。乃以籠盛、置、籠引上、書之。去地二十五丈、既下、鬚髮皓然。還語子弟、直絕此法。(三國史)

〔二〕貧者、不以貲財爲上禮。老者、不以筋力爲上禮。(曲禮)

〔三〕たれこめて春の行方を知らぬまに待ちし櫻もうつろひにけり(古今集、藤原因香)

ことを知るべし。凌雲の額を書きて、白髮の人となりしためしなきにあらざ。(第百二十九段)

六七 貧しき者は

貧しき者は財をもて禮とし、老いたる者は力をもて禮とす。おのが分を知りて、及ばざる時は、すみやかにやむを智といふべし。許さざらむは、人のあやまりなり。分を知らずしてしひてはげむは、おのれがあやまりなり。貧しくて分を知らざれば、盗み、力衰へて分を知らざれば、病をうく。(第百三十一段)

六八 花はさかりに

花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものか。雨に對ひて月を戀ひ、たれこめて春のゆくへ知らぬも、なほあはれになさけ深

し。咲きぬべきほどの梢散りしをれたる庭などこそ、みどころ多
 けれ。歌のことばがきにも、花見にまかれりけるには、やく散り過
 ぎにければとも、さはることありて、まからでなども書けるは、花を
 見てといへるにおとれることかは。花の散り、月のかたぶくをし
 たふならひは、さることなれど、ことにかたくななる人ぞ、この枝か
 の枝散りにけり。今は見所なし、などはいふめる。

よろづの事も始め終りこそをかしけれ。望月のくまなきを、千
 里の外まで眺めたるよりも、曉近くなりて待ち出でたるが、いと心
 深う、青みたるやうにて、深き山の杉の梢に見えたる木の間の影、う
 ちしぐれたるむら雲がくれのほど、またなくあはれなり。椎柴、し
 らかしなどの、ぬれたるやうなる葉の上に、きらめきたるこそ、身に
 しみて、心あらむ友もがなと、都こひしうおぼゆれ。

すべて月花をば、さのみ目にて見るものかは。春は家を立ち去

らでも、月の夜はねやの中ながらも思へるこそ、いと頼もしうをか
 しけれ。よき人は、ひとへにすけるさまにも見えず、興ずるさまも
 なほざりなり。片田舎の人こそ、色こくよろづはもて興ずれ。花
 のもとには、ねぢより、立ちより、あからめもせずまもりて、酒飲み、連
 歌して、はては大きな枝、こゝろなく折り取りぬ。泉には、手足さ
 しひたして、雪にはおり立ちて跡つけなど、よろづのもの、よそなが
 ら見ることなし。

さやうの人の祭見しさま、いとめづらかなりき。「見事いとおそ
 し。その程は、棧敷不用なり。」とて、奥なる屋にて酒飲み、ものくひ、圍
 碁、雙六など遊びて、棧敷には人をおきたれば、「渡り候。」といふ時に、お
 のおの肝つぶるゝやうに争ひ走り上りて、落ちぬべきまで簾はり
 出でて、押しあひつゝ、一事も見もらさじとまもりて、とありかゝり
 とものごとにいひて、渡り過ぎぬれば、「また渡らむまで。」といひてお

りぬ。たゞものをのみ見むとするなるべし。都の人のゆゑしげなるは、ねぶりにていとも見ず。若く末々なるは、宮仕にたちゐる人の後にさぶらふは、さまあしくも及びかゝらず。わりなく見むとする人もなし。

何となく葵かけわたしてなまめかしきに、明けはなれぬほど、忍びて寄する車どものゆかしきを、それかかれかなど、思ひ寄すれば、牛飼・下部などの見知れるもあり。をかしくも、きら／＼しくも、さまさまに行きかふ、見るもつれ／＼ならず。暮るゝほどには、立てならべつる車ども、所なくなみゐつる人も、いづ方へ行きつらむ、ほどなく、稀になりて、車どものらうがはしさもすみぬれば、簾たゝみもとり拂ひ、目の前にさびしげになりゆくこそ、世のためしも思ひ知られてあはれなれ。(第百三十七段)

六九 家にありたき木

家にありたき木は松櫻。松は五葉もよし。花はひとへなるよし。八重櫻は奈良の都にのみありけるを、この頃ぞ世に多くなり侍るなる。吉野の花、左近の櫻、みな一重にてこそあれ。八重櫻はことやうのものなり。いとこちたくねぢけたり。植ゑずともありなむ。おそ櫻、またすさまじ。蟲のつきたるもむづかし。梅は白き、うす紅梅。ひとへなるが疾く咲きたるも、重りたる紅梅のほひめでたきもみなをかし。おそき梅は櫻に咲きあひておぼえ劣り、けおされて枝にしほみつきたる、心うし。「一重なるがまづ咲きて散りたるは、心とくをかし」とて、京極入道中納言は、なほ一重梅をなむ軒近く植ゑられたりける。京極の屋の南むきに、今も二本侍るめり。柳、またをかし。卯月ばかりのわか楓、すべてよろづの

〔一〕藤原定家。俊成の子。歌人。新古今、新勅撰集の撰者。仁治二年歿。年八十。
〔二〕今、上京區二條北側京極西にその邸址の石標がある。

花紅葉にもまさりてめでたきものなり。橘かつら、いづれも木はものふり大きなるよし。

草は山吹・藤・杜若なでしこ。池にははちす。秋の草は萩・薄・きちから・萩・女郎花・ふぢばかましをに・われもかう・刈萱りんだう・菊・黄菊も。葛・葛・朝顔、いづれもいと高からず、さゝやかなるが、垣に繁からぬよし。この外世に稀なるもの、唐めきたる名の聞きにくく、花も見馴れぬなど、いとなつかしからず。おほかた、何もめづらしくありがたきものは、よからぬ人のもて興ずるものなり。さやうのもの、なくてありなむ。(第百三十九段)

七〇 身死して財のこるは

身死して財のこるは、智者のせざるところなり。よからぬもの蓄へ置きたるも拙く、よきものは、心をとめけむとはかなし。こち

たく多かる、まして口惜し。我こそ得めなどいふものどもありてあとに争ひたる、さまあし。後は誰にと志すものあらば、生けらむうちにぞ譲るべき。朝夕なくてかなはざらむ物こそあらめ、その外は何も持たでぞあらまほしき。(第百四十段)

七一 悲田院の堯蓮上人は

悲田院の堯蓮上人は、俗姓は三浦のなにがしとかや、さうなき武者なり。故郷の人の來りて物語すとて、あづま人こそ、いひつることとはたのまるれ。都の人は、ことうけのみよくてまことなし。といひしを、聖、それはさこそおぼすらめども、おのれは都に久しく住みて、馴れて見侍るに、人の心劣れりとは思ひ侍らず。なべて、心やはらかにしてなさけあるゆゑに、人のいふほどのことけやけくないなみ難く、よろづえいひ放たず、心よわくことうけしつ。いつはりせ

むとは思はねど、ともしくかなはぬ人のみあれば、おのづから本意
通らぬこと多かるべし。あづま人はわが方なれど、げには心の色
なく、なさけおくれ、ひとへにすくよかなるものなれば、はじめより
否といひてやみぬ。にぎはひゆたかなれば、人にはたのまるゝぞ
かし。」とことわれ侍りしこそ、このひじり聲うちゆがみ、あらゝ
しくて、聖教のこまやかなることわり、いとわきまへずもやと思ひ
しに、このひと言の後、心にくゝなりて、多かる中に、寺をも住持せら
るゝは、かくやはらぎたるところありて、その益もあるにこそとお
ぼえ侍りし。(第百四十一段)

七三 心なしと見ゆるものも

心なしと見ゆるものも、よき一言はいふものなり。あるあらゝ
びすのおそろしげなるがかたへにあひて、「御子はおはすや。」と問ひ

しに、「一人ももち侍らず。」と答へしかば、「さてはもののははれは知り
給はじ、情なき御心にぞものし給ふらむと、いとおそろし。子故に
こそ、よろづのあはれは思ひ知らるれ。」といひたりし、さもありぬべ
き事なり。恩愛の道ならでは、かゝる者の心に慈悲ありなむや。
孝養の心なきものも、子もちてこそ親の志は思ひ知らるれ。

世を棄てたる人の、よろづにするすみなるが、なべてほだし多か
る人の、よろづにへつらひ、望ふかきを見て、むげに思ひくたすはひ
がごとなり。その人の心になりて思へば、まことにかなしからむ
親のため、妻子のためには、恥をも忘れ、盗をもしつべき事なり。さ
れば盗人をいましめ、ひがごとをのみ罪せむよりは、世の人の飢ゑ
ず、寒からぬやうに、世をば行はまほしきなり。人恒の産なき時は、
恒の心なし。人きはまりて盗す。世治まらずして、凍餒のくるし
みあらば、科のもの絶ゆべからず。人を苦しめ、法を犯さしめて、そ

〔一〕無^レ恒^レ産^一因^レ無^レ恒^レ心^一。
(孟子)

〔二〕人窮^レ則^レ詐^一。(孔子家語)

れをつみなはむこと、不便のわざなり。さていかゞして、人を恵むべきとならば、上の奢り費す所をやめ、民を撫で農をすゝめば、下に利あらむこと疑あるべからず。衣食世の常なる上に、ひがごとせむ人をぞ、まことの盗人とはいふべき。(第四百十二段)

七三 人の終焉のありさま

人の終焉のありさまの、いみじかりしことなど、人の語るを聞くに、たゞ「静かにしてみだれず」といはば心にくかるべきを、おろかなる人は、あやしくことなる相を語りつけ、いひしことばも、ふるまひも、おのれが好む方にほめなすこそ、その人の日ごろの本意にもあらずやとおぼゆれ。この大事は、權化の人も定むべからず、博學の士もはかるべからず。おのれ違ふ所なくば、人の見聞くにはよるべからず。(第四百十三段)

〔一〕大僧正。天台座主。壽永二年、木曾義仲の亂に頼親忠に殺された。

七四 明雲座主

〔二〕明雲座主、相者にあひ給ひて、「おのれ若し兵仗の難やある。」と尋ね給ひければ、相人「誠に其の相おはします。」と申す。「如何なる相ぞ。」と尋ね給ひければ、「傷害の恐れおはしますまじき御身にて、假にもかく思し寄りて尋ね給ふ。これすでに其の危みの兆なり。」と申しけり。果して矢に中りて失せ給ひにけり。(第四百十六段)

七五 能をつかむとする人

能をつかむとする人、よくせざらむほどは、なまじひに人に知られじ、うちよくならひ得て、さし出でたらむこそ、いと心にくからめと常にいふめれど、かくいふ人、一藝も習ひ得ることなし。未だ堅固かたほなるより、上手の中にまじりて、そしり笑はるゝにも

恥ぢず、つれなくすきてたしなむ人天性その骨こなけれども、道になづまず、みだりにせずして、年をおくれば、堪能のたしなまざるよりは、遂に上手の位に至り、徳たけ、人に許されて、ならびなき名を得ることなり。天下の物の上手といへども、はじめは不堪のきこえもあり、むげの瑕瑾もありき。されどもその人道のおきて正しく、これを重くして、放埒せざれば、世の博士にて、萬人の師となること、諸道かはるべからず。(第百五十段)

七六 筆を取ればもの書かれ

筆を取ればもの書かれ、樂器を取れば音を立てむと思ふ。盃を取れば酒を思ひ、賽を取れば攤うたむことを思ふ。心は必ずことに觸れて來る。かりにも不善のたはぶれをなすべからず。あからさまに聖教の一句を見れば、何となく前後の文も見ゆ。率爾に

して、多年の非を改むる事もあり。かりに今、この文をひろげざらましかば、この事を知らむや。これすなはち觸るゝところの益なり。心更に起らずとも、佛前にありて數珠を取り、經をとらば、怠るうちにも善業おのづから修せられ、散亂の心ながらも繩床に坐せば、おぼえずして禪定なるべし。事理もとより二つならず。外相もしそむかざれば、内證必ず熟す。しひて不信といふべからず。仰ぎてこれをたふとむべし。(第百五十七段)

七七 遍照寺の承仕法師

遍照寺二の承仕法師、池の鳥を日頃飼ひつけて、堂の内まで餌をまきて、戸一つをあけたれば、數もしらず入りこもりける後、おのれも入りて、立てこめて、捕へつゝ、殺しけるよそほひ、おどろくしく聞えけるを、草刈る童聞きて、人に告げければ、村の男どもおこりて、入

〔二〕京都の西郊、嵯峨の廣澤池の西北畔にあつた。

りて見るに、大雁どもふためきあへる中に、法師まじりて、うち伏せねぢ殺しければ、この法師を捕へて、所より使廳へ出したりけり。殺すところの鳥を、首にかけさせて、禁獄せられにけり。基俊大納言、別當の時になむ侍りける。(第百六十二段)

七八 世の人相逢ふごき

世の人相逢ふとき、暫くも黙止もだしすることなし。必ず言葉あり。そのことを聞くに、多くは無益の談なり。世間の浮説人の是非、自他のために失おほく、得すくなし。これを語る時、たがひの心に、無益の事なりといふことを知らず。(第百六十四段)

七九 一道にたづさはる人

一道にたづさはる人、あらぬ道のむしろに臨みて、あはれわが道

ならましかば、かくよそに見侍らじものを」といひ、心にも思へること常のことなれど、よにわろく覺ゆるなり。知らぬ道の羨しく覺えば、あな羨し。などか習はざりけむ」といひてありなむ。

わが智を取り出でて人に争ふは、角あるものの角をかたぶけ、牙あるものの牙をかみ出すたぐひなり。人としては善に誇らず、ものと争はざるを徳とす。他にまさることのあるは大きな失なり。品の高さにても、才藝のすぐれたるにても、先祖のほまれにても、人にまされりと思へる人は、たとひ言葉に出でてこそいはねども、内心にそこばくのとがあり、つゝしみてこれを忘るべし。をこにも見え、人にもいひけたれ、わざはひをも招くは、たゞこの慢心なり。一道にも、まことに長じぬる人は、おのづからあきらかに、その非を知るが故に、こゝろざし常に満たずして、遂にもものに誇ることなし。(第百六十七段)

八〇 年老いたる人の

年老いたる人の、一事すぐれたる才能ありて、この人の後には誰にか問はむ。などいはるゝは、老のかたうどにて、生けるもいたづらならず。さはあれど、それもすたれたるところのなきは、一生このことにて暮れにけりと拙く見ゆ。今は忘れにけり。といひてありなむ。

大かたは、知りたりとも、すゝろにいひちらすは、さばかりの才にはあらぬにやと聞え、おのづからあやまりもありぬべし。さだかにもわきまへ知らず。などいひたるは、なほまことに道のあるじともおぼえぬべし。まして、知らぬこと知りがほに、おとなしくもどきぬべくもあらぬ人のいひ聞かするを、さもあらずと思ひながら聞きおたる、いとわびし。(第百六十八段)

八一 さしたる事なくて

さしたる事なくて、人のがり行くはよからぬことなり。用ありて行きたりとも、そのことはてなばとく歸るべし。ひさしくゐたる、いとむづかし。人と對ひたれば、言葉多く、身もくたびれ、心も靜かならず、よろづのことさはりて時をうつす。互のため益なし。厭はしげにいはむもわろし。心づきなきことあらむ折は、なかなかそのよしをもいひてむ。おなじ心に對はまほしくおもはむ人の、つれづれにて、今しばし、けふは心靜かに。などいはむは、このかぎりにはあらざるべし。阮籍が青き眼、誰もあるべきことなり。そのこととなきに人の來りて、のどかに物がたりして歸りぬる、いとよし。また文も、久しくきこえさせねば。などばかりいひおこせたる、いとうれし。(第百七十段)

〔一〕晋時代の人。竹林七賢の一人。
〔二〕阮籍字嗣宗、不拘禮教、能爲青白之眼、見禮俗之士、以青白眼對之。及嵇喜來弔、籍作青白眼、喜不覺而退。喜弟康聞之、乃齎酒挾琴造焉。籍大悅、乃見青眼。(晉書)

八二 貝をおほふ人

貝をおほふ人の、わが前なるをばおきて、よそを見わたして、人の袖の陰膝の下まで目をくばるまに前なるをば人におほはれぬ。よく掩ふ人は、よそまでわりなく取るとは見えずして、近きばかり掩ふやうなれど、多く掩ふなり。碁盤の隅に石を立てて弾くに、むかひなる石をまもりて弾くはあたらず。わが手許をよく見て、こなるひじり目をすぐに弾けば、立てたる石必ずあたる。

よろづのこと、外に向きて求むべからず。たゞこゝもとを正しくすべし。清獻公がことばに、好事を行じて前程を問ふことなかれ。といへり。世をたまたむ道もかくや侍らむ。内を慎まず、軽くほしまゝにしてみだりなれば、遠國必ずそむく。そむく時はじめて謀を求む。風にあたり、濕に臥して、病を神靈に訴ふるは、おろ

〔一〕北宋の趙抃。その座右の銘に「行好事、莫問前程」とある。

〔二〕自致、百病之本。而怨、咎於神靈。手。當、風臥。濕、反責、他人於失墜。皆癡人也。(本草經)

〔一〕支那の夏の王。
〔二〕當時の蠻族。

かなる人なり。と醫書にいへるがごとし。目の前なる人の愁をやめ、恵をほどこし、道を正しくせば、その化遠く流れむことを知らざるなり。禹の行きて三苗を征せしも、軍をかへして徳をしくには如かざりき。(第七十一段)

八三 若き時は血氣内にあまり

若き時は血氣内にあまり、心ものに動きて、情欲多し。身をあやぶめて碎けやすきこと、珠を走らしむるに似たり。美麗を好み、も寶を費し、これを棄てて、昔の袂にやつれ、勇める心さかりにして、ものと争ひ、心に恥ぢうらやみ、好むところ日々定まらず。色に耽り、情にめで、行をいさぎよくして、百年の身をあやまり、命を失へるためし願はしくして、身のまたく久しからむことをば思はず。すける方に心引きて、ながき世がたりともなる。身をあやまつこと

は、若き時のしわざなり。

老いぬる人は精神衰へ、淡くおろそかにして、感じ動く所なし。心おのづから静かなれば、無益の業をなさず。身をたすけて愁なく、人のわづらひなからむことを思ふ。老いて智の若き時にまされること若くして形の老いたるにまされるが如し。(第百七十二段)

八四 世には心得ぬこと

世には心得ぬことの多きなり。ともあるごとには、まづ酒をすすめて、しひ飲ませたるを興とする事、いかなる故とも心得ず。飲む人の顔、いと堪へがたげに、眉をひそめ、人目をはかりて棄てむとし、逃げむとするを捕へて引きとめて、すゝろに飲ませつれば、うるはしき人も、忽ちに狂人となりてをこがましく、息災なる人も、目の前に大事の病者となりて、前後も知らずたふれ臥す。祝ふべき

日などは、あさましかりぬべし。あくる日まで頭いたく、ものくはず、によびふし、生を隔てたるやうにして、きのふのことおぼえず。おほやけわたくしの大事をかきて煩となる。人をしてかゝる目を見すること、慈悲もなく、禮儀にもそむけり。かくからき目にあひたらむ人、ねたくくちをしと思はざらむや。人の國にかゝるならひあなりと、これらになき人ごとにて傳へ聞きたらむは、あやしく不思議におぼえぬべし。

人の上にて見たるだに心うし。思ひ入りたるさまに、心にくしと見し人も、思ふ所なく笑ひのゝしり、ことば多く、烏帽子ゆがみ、紐はづし、脛高くかゝげて、用意なき氣色、日頃の人もおぼえず。女は、額髪はれらかに搔きやり、まばゆからず、顔うちさゝげてうち笑ひ、盃もてる手に取りつき、よからぬ人は、肴とりて口にさしあて、みづからも食ひたる、さまあし。聲のかぎり出しておのゝ歌ひ舞

ひ、年老いたる法師召し出されて、黒くきたなき身を肩ぬぎて、目もあてられずすぢりたるを、興じ見る人さへうとましくにくし。あ
るは又わが身のいみじきことども、かたはらいたくいひ聞かせ、あ
るは醉泣し、下さまの人はのりあひいさかひて、あさましく、恐ろし
く、恥がましく、心うき事のみありて、はては許さぬものどもおし取
りて縁より落ち、馬車より落ちてあやまちしつ。ものにも乗らぬ
きはは大路をよろぼひゆきて、築土門の下などにむきて、えもいは
ぬことどもしちらし、年老い袈裟かけたる法師の、小童の肩をおさ
へて、聞えぬことどもいひつゝ、よろめきたる、いとかはゆし。

かゝる事をして、この世も後の世も益あるべきわざならば、い
かがはせむ。この世にてはあやまち多く、財を失ひ、病をまうく。
百薬〔一〕の長とはいへど、よろづの病は酒よりこそ起れ。憂を忘ると
いへど、酔ひたる人ぞ、過ぎにしうさをも思ひ出でて泣くめる。後

〔一〕鹽、食肴之將、酒、百薬之
長也。(前漢書)

の世は人の智慧を失ひ、善根を焼くこと火の如くして、悪をまし、よ
ろづの戒を破りて、地獄に落つべし。酒を取りて人に飲ませたる
人、五百生が間、手なきものに生る。とこそ佛は説き給ふなれ

かくうとましと思ふものなれど、おのづから棄て難き折もある
べし。月の夜、雪の朝、花のもとにても、心のどかに物語して、盃出し
たる、よろづの興を添ふるわざなり。つれづれなる日、思ひの外に
友の入り来て、とり行ひたるも、心なぐさむ。なれづしからぬあ
たりの御簾の中より、御くだもの御酒など、よきやうなるけはひし
てさし出されたる、いとよし。冬、狭き所にて、火にてもものいりなど
して、隔なきどちさし向ひて、多く飲みたる、いとをかし。旅のかり
や、野山などにて、御肴〔二〕ななどいひて、芝の上にて飲みたるもをか
し。いたういたむ人の、しひられて、少し飲みたるも、いとよし。よ
き人のとりわきて、今一つ、上すくなし。などのたまはせたるもうれ

〔二〕催馬樂の「我家」の詞に
よる。

し。近づかまほしき人の、上戸にて、ひしくと馴れぬる、またうれし。さはいへど上戸はをかしく、罪許さるゝものなり。酔ひくたびれて、朝いしたる所を、主人の引きあけたるに、まどひて、ほれたる顔ながら、細きもとゞりさし出し、もの、著あへずいだき持ち、引きしろひて逃ぐるかいどり姿のうしろで、毛生ひたる細脛のほど、をかしくつきくし。(第百七十五段)

八五 降りくこ雪

「降りくこ雪、たんばのこ雪」といふこと、よね搗き篩ひたるに似たれば粉雪といふ。『たまれこ雪』といふべきを、あやまりて『たんばの』とはいふなり。『垣や木のまたに』と謠ふべし。『或物識申しき。昔よりいひける事にや、鳥羽院の幼くおはしまして雪の降るに、かく仰せられけるよし、讚岐典侍が日記に書きたり。(第百八十一段)』

〔一〕堀河天皇の官女。歌人。

八六 相模守時頼の母

相模守時頼の母は松^三下禪尼とぞ申しける。守を入れ申さるゝことありけるに、すゝけたる明障子のやぶれば、禪尼手づから小刀して、切り廻しつゝ、張られければ、兄の城^三介義景、その日の經^三營して候ひけるが、たまはりて、なにがし男に張らせ候はむ。さやうのことにて心得たるものに候。と申されければ、その男、尼が細工によもまさり侍らじ。とて、なほ一間づつ張られけるを、義景、みなを張りかへ候はむは、はるかにたやすく候ふべし。まだらに候ふも、見ぐるしくや。と、かさねて申されければ、尼も、後はさはく、と張りかへむと思へども、けふばかりは、わざとかくてあるべきなり。ものは破れたる所ばかりを修理して用ふることぞと、若き人に見ならはせて心づけむためなり。と申されける、いとありがたかりけり。

〔一〕鎌倉第五代の執権。
〔二〕時氏の室、秋田城介景母。
〔三〕安達景盛の長男。嘉禎年中秋田城介となる。

世を治むる道、儉約を本とす。女性なれども、聖人の心に通へり。天下を保つほどの人を子にてもたれける、まことにたゞ人にはあらざりけるとぞ。(第百八十四段)

八七 よろづの道の人

よろづの道の人、たとひ不堪なりといへども、堪能の非家の人に
ならぶ時、必ずまさることは、たゆみなく慎みて、軽々しくせぬと、ひ
とへに自由なるとの等しからぬなり。藝能所作のみにあらず、大
かたのふるまひ、心づかひも、おろかにして慎めるは、得の本なり。
巧にしてほしきまゝなるは、失の本なり。(第百八十七段)

八八 けふはその事を

けふはその事をなさむと思へど、あらぬいそぎまづいで来てま

ぎれ暮し、待つ人はさはりありて、たのめぬ人は來り、頼みたるかた
のことはたがひて、思ひよらぬ道ばかりは叶ひぬ。わづらはしか
りつることはことなくて、やすかるべきことはいと心ぐるし。日
日に過ぎゆくさま、かねて思ひつるに似ず。一年のこともかくの
如し。一生の間もまたしかなり。かねてのあらまし皆違ひゆく
かと思ふに、おのづから違はぬこともあれば、いよくものは定め
難し。不定と心得ぬるのみ、まことにたがはず。(第百八十九段)

八九 達人の人を見る眼は

達人の人を見る眼は少しもあやまるところあるべからず。た
とへばある人の、世にそらごとをかまへ出して、人をはかることあ
らむに、すなほにまことと思ひて、いふまゝにはからるゝ人あり。
あまり深く信を起して、なほわづらはしく、そらごとを心得そふる

人あり。又何としも思はで、心をつけぬ人あり。又いさゝかおぼつかなくおぼえて、たのむにもあらず、たのまざるもあらで、案じゐたる人あり。又まことしくはおぼえねども、人のいふことなれば、さもあらむとて、やみぬる人もあり。又さまざまに推し、心得たるよしして、かしこげにうちうなづき、ほゝゑみてゐたれど、つやく知らぬ人あり。又推し出して、あはれさるめりと思ひながら、なほあやまりもこそあれとあやしむ人あり。又ことなるやうもなかりけりと手をうちて笑ふ人あり。又心得たれども、知れりともいはず、おぼつかかなからぬは、とかくのことなく、知らぬ人と同じやうにて過ぐる人あり。又このそらごとの本意を、はじめより心得て、少しもあざむかず、かまへ出したる人と同じ心になりて、力をあはする人あり。

愚者の中のたはぶれだに、知りたる人の前にては、このさまざま

の得たる所、詞にても顔にても、かくれなく知られぬべし。まして明かならむ人の、まどへるわれらを見むこと、掌の上のものを、見むがごとし。(第百九十四段)

九〇 人の田を論ずるもの

人の田を論ずるもの、うたへにまけて、ねたさに、その田を刈りて取れ。とて人をつかはしけるに、まづ道すがらの田をさへ刈りもてゆくを、これは論じ給ふところにあらず。いかにかくは、といひければ刈るものども、その所とて、刈るべきことわりなければ、いひひげごとせむとて、まかるものなれば、いづくをか刈らざらむ。とぞいひける。ことわりいとをかしかりけり。(第百九段)

九一 よろづの事は

よろづの事は頼むべからず。おろかなる人は深くものをたの

む故に、恨み怒ることあり。勢ありとてたのむべからず、こはきものまづほろぶ。財多しとてたのむべからず、時の間に失ひ易し。才ありとてたのむべからず、孔子も時に遇はず。徳ありとてたのむべからず、顔回も不幸なりき。君の寵をもたのむべからず、誅を受くる事速かなり。奴したがへりとてたのむべからず、背き走ることあり。人の志をもたのむべからず、必ず變ず。約をもたのむべからず、信あること少し。

身をも人をも頼まざれば、是なる時は喜び、非なる時は恨みず。左右ひろければさはらず、前後遠ければふさがらず。せばき時はひしげくたく。心を用ふることすこしきにして、きびしき時は、物にさかひ争ひてやぶる。ゆるくしてやはらかなる時は、一毛も損せず。人は天地の靈なり。天地はかぎるところなし。人の性何ぞこれに異ならむ。寛大にして極まらざる時は、喜怒これにさは

らずして、ものの爲にわづらはず。(第二百十一段)

九二 秋の月は

秋の月はかぎりなくめでたきものなり。いつとても月はかくこそあれとて、思ひわかざらむ人は、むげにこゝろうかるべきことなり。(第二百十二段)

九三 平宣時朝臣

平宣時朝臣、老の後昔がたりに、最明寺入道、ある宵のまに、よばるることありしに、「やがて」と申しながら、直垂〔三〕のなくて、とかくせしほどに、また使來りて、「直垂などのさぶらはぬにや。夜なれば、ことやうなりとも、疾く」とありしかば、なえたる直垂、うちくのまゝにてまかりたりしに、銚子に土器とりそへてもて出でて、「この酒を一人



〔一〕北條時政の曾孫。別姓大佛。
〔二〕北條時頼。
〔三〕直垂。

たうべむがさう／＼しければ申しつるなり。肴こそなけれ。人は静まりぬらむ。さりぬべきものやあるといづくまでも求め給へ。とありしかば、紙燭さしてくま／＼をもとめしほどに、臺所の棚に、小土器こかまひに味噌の少しつきたるを見出でて、「これぞ求め得て候。」と申ししかば、「こと足りなむ。」とて心よく數獻に及びて興に入られ侍りき。其の世にはかくこそ侍りしか。」と申されき。(第二百十五段)

九四 ある大福長者

ある大福長者のいはく、人はよろづをさし置きて、ひたぶるに徳をつくべきなり。貧しくては生けるかひなし。富めるのみを人とす。徳をつかむと思はば、すべからくまづその心づかひを修行すべし。その心といふは他のことにあらず。人間常住の思に住して、かりにも無常を觀ずることなかれ。これ第一の用心なり。

〔一〕水流し、濕ニ、火就キ、燥ケルニ、雲ニ、從レ龍、風從レ虎。(易經)

次に萬事の用をかなふべからず。人の世にある、自他につけて所願無量なり。慾に従ひて志を遂げむと思はば、百萬の錢ありといふとも、しばらくも住すべからず。所願はやむ時なし。財は盡くる期あり。かぎりある財をもちて、かぎりなき願に従ふこと、得べからず。所願心にきざすことあらば、われを亡すべき惡念來れりと堅く慎み恐れて、小用をもなすべからず。次に錢を奴の如くしてつかひ用ふるものと知らば、長く貧苦を免るべからず。君の如く、神の如く、おそれ尊みて、從へ用ふることなかれ。次に恥に臨むといふとも、怒り恨むることなかれ。次に正直にして、約を固くすべし。この義を守りて利を求めむ人は、富の來ること、火の乾けるにつき、水の下れるに隨ふが如くなるべし。錢積りて盡きざる時は、宴飲聲色を事とせず、居所を飾らず、所願を成ぜざれども、心とこしなへに安く樂し。」と申しき。

そもそも人は所願を成ぜむが爲に、財をもとむ。錢を財とすることは、願をかなふるが故なり。所願あれどもかなへず、錢あれども用ひざらむは、全く貧者と同じ。何をか樂しびとせむ。このおきては、たゞ人間の望を斷ちて、貧を憂ふべからずと聞えたり。欲をなして樂しびとせむよりは、しかじ、財なからむには、癰疽を病むもの、水に洗ひて樂しびとせむよりは、病まざらむには、如かじ。こゝに至りては、貧富わく所なし。究竟は理即にひとし。大欲は無欲に似たり。(第二百十七段)

九五 園別當入道

園別當入道はさうなき庖丁者なりけり。「ある人のもとにて、いみじき鯉を出したりければ、みな人別當入道の庖丁を見ばやと思へども、たやすくうち出でむもいかゞとためらひけるを、別當入道

〔一〕藤原基氏。參議、檢非違使別當。弘安五年歿。

〔二〕西園寺公經。寛元二年歿。

さる人にて、「このほど百日の鯉を切り侍るを、今日缺き侍るべきにあらず。まげて申し請けむ。」とて切られける。いみじくつきくし興ありて、人ども思へりける。と、或人、北山太政入道殿に語り申されたりければ、「かやうの事、おのれはよにうるさく覺ゆるなり。『切りぬべき人なくば、たべ、切らむ。』といひたらむは、なほよかりなむ。なんでふ百日の鯉を切らむぞ。」とのたまひたりし、をかしく覺えしと、人の語り給ひける、いとをかし。

大方ふるまひて興あるよりも、興なくてやすらかなるがまさりたることなり。まれ人の饗應なども、ついでをかきやうに取りなしたるも、まことによけれども、たゞそのこととなくて、取り出でたる、いとよし。人にもものを取らせたるも、ついでなくて、「これを奉らむ。」といひたる、まことの志なり。惜しむよしして、乞はれむと思ひ、勝負の負業にことづけなどしたる、むづかし。(第二百三十一段)

九六 よろづのとがあらじと

よろづのとがあらじと思はば、何事にもまことありて人をわか
ずうやくしく、詞すくなからむにはしかじ。男女老少、みなさる
人こそよけれども、ことにわかかたちよき人の、ことうるはしき
は、忘れがたく思ひつかるゝものなり。よろづのとがは馴れたる
さまに上手めき、ところ得たるけしきして、人をないがしろにする
にあり。(第二百三十三段)

九七 人のものを問ひたるに

人のものを問ひたるに、知らずしもあらじ、ありのまゝにいはむ
はをこがましとにや、心まどはすやうにかへりごとしたる、よから
ぬ事なり。知りたることも、なほさだかにと思ひてや問ふらむ。

またまことに知らぬ人も、なかなからむ。うらゝかにいひ聞か
せたらむは、おとなしく聞えなまし。人は、いまだ聞き及ばぬこと
を、わが知りたるまゝに、さてもその人の事、あさましき。などばか
りいひやりたれば、いかなることのあるにか。とおしかへし問ひに
やるこそ心づきなけれ。世にふりぬる事をも、おのづから聞きも
らすあたりもあれば、おぼつかなからぬやうに告げやりたらむ、あ
しかるべきことかは。かやうのことは、もの馴れぬ人のあること
なり。(第二百三十四段)

九八 ぬしある家には

ぬしある家には、すゝろなる人、心のまゝに入りくることなし。
あるじなきところには、道ゆき人みだりに立ち入り、狐・梟やうのも
の、人げにせかれねば、所得顔に入り住み、こだまなどいふ、けしか

らぬかたちもあらはるゝものなり。又鏡には色・形なき故に、よろづの影來りてうつる。鏡に色・形あらましかばうつらざらまし。虚空よくものを容る。われらが心に念々のほしきまゝに來り浮ぶも、心といふもののなきにやあらむ。心に主あらましかば、胸の中にそこばくのことはいり來らざらまし。(第二百三十五段)

九九 丹波に出雲といふ所

丹波に出雲二〇といふ所あり。大社三〇をうつして、めでたく造れり。志田のなにかしとかやする所なれば、秋の頃、聖海上人その外も人あまた誘ひて、いざたまへ、出雲拜みに。かおもちひめさせむ。とて具しもてゆきたるに、おのゝ拜みてゆゝしく信おこしたり。御前なる獅子三二・狛犬三三そむきてうしろざまに立ちたりければ、上人いみじく感じて、あなめでたや、この獅子の立ちやう、いとめづらし。深

二〇 丹波國南桑田郡千歲村
字出雲。
二一 島根縣藏川郡杵築町に
ある。官幣大社。

き故あらむ。」と涙ぐみて、「いかに殿ばら、殊勝のことは御覽じとがめずや。むげなり。」といへば、おのゝあやしみて、「まことに他に異なりけり。都のつとに語らむ。」などいふに、上人なほゆかしがりて、おとなしくもの知りぬべき顔したる神官を呼びて、「この御社の獅子の立てられやう、定めて習あることに侍らむ。ちと承らばや。」といはれければ、「その事に候。さがなきわらべどもの仕りける、奇怪に候ふことなり。」とて、さしよりてすゑ直していにければ、上人の感涙いたづらになりけり。(第二百三十六段)

100 八つになりし年

八つになりし年、父に問ひていはく、「佛はいかなるものにか候ふらむ。」といふ。父がいはく、「佛には人のなりたるなり。」と。又問ふ、「人は何として佛にはなり候ふやらむ。」と。父また、「佛の教によりて成

昭和十一年三月二十日
文部省檢定
中學國語教科用
高等女學校實業學校國語科用

るなり。」と答ふ。又問ふ、「教へ候ひける佛をば、何が教へ候ひける。」と。
又答ふ、「それもまた、先の佛の教によりて成り給ふなり。」と。又問ふ、「
その教へはじめ候ひける第一の佛は、いかなる佛にか候ひける。」と
いふ時、父、「空よりや降りけむ、土よりや湧きけむ。」といひて笑ふ。「問
ひつめられて、え答へずなり侍りつ。」と、諸人に語りて興じき。

(第二百四十三段)

— 終 —

昭和十年九月五日印刷
昭和十年九月十日發行
昭和十一年二月二十五日修正再版印刷
昭和十一年三月一日修正再版發行

徒然草抄
定價金四十錢

著者檢印

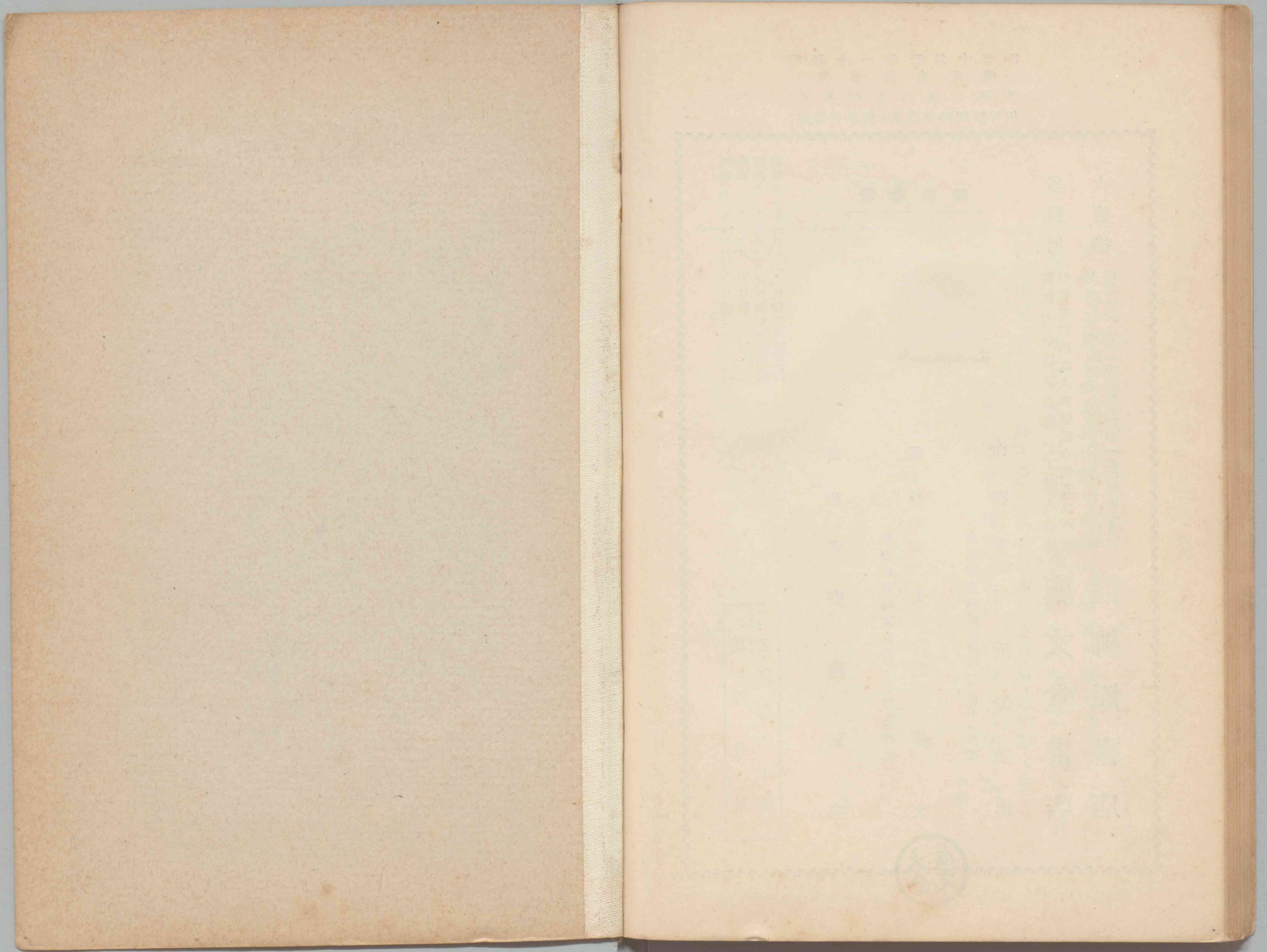


著者 安藤正次
發行所 東京市京橋區京橋一丁目八番地
發行 大倉廣文
印刷者 川橋源三郎
東京市京橋區木挽町一丁目十一番地

發行所 東京市京橋區京橋一丁目八番地
大賣捌 大阪市東區北久太郎町四丁目十六番地
廣文堂書店
柳原書店
合資會社

振替東京四六八四電話京橋五六六番
振替大阪三三二電話船場四一四船場四七九〇







四ノ六
保田富

広島大学図書
2000081496
